

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

5



第七十八卷 第五号 日本幼稚園協会

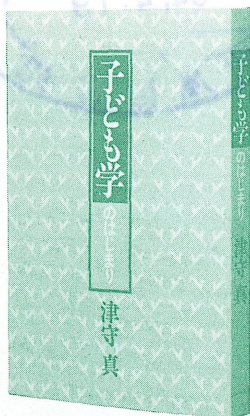
新刊案内

好評発売中

子ども学のはじまり

津守 真著

●定価1,200円／B6判・296頁



保育の根本を探る……

生きた子どもの生活にふれ、子どもとともに楽しむ。一見何でもないようなこの瞬間に、大人は、子どもの世界にひきこまれ、「子ども学」へのたびだちをします。「科学的」という名のもとに子どもを対象化しすぎていた研究のあり方を反省し、子どもの行動を人間の現象として考える「子ども学」は、これからの保育研究に新たな光を投げかけます。

好評発売中

幼な子の如くならずば

—あるヒューマニストの教育随想集—

周郷 博著

●定価 750円／B6判・192頁

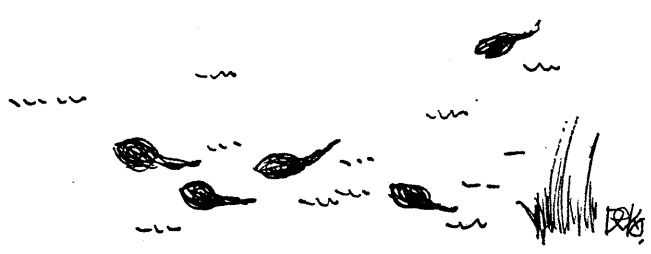
便利さ、快適さに流されて、子どもが育つ環境がおそろしいほど悪化している現在、幼児教育の場、制度も、整っているかにみえて、実際にはよそよそしく、借りもののように人間の温もり欠けるさらいがあります。本書は、著者のお茶大附属幼稚園長時代の4年間、人知れず悩み、考え、思索をこらしたものを主に、明日の日本の幼児教育のかたちを描きだそうとした随想集です。

フレール館

幼児の教育

第七十八卷 第五号





幼児の教育 目次

第七十八卷 五月号

© 1979
日本幼稚園協会

表紙 油野 誠 一
カッ ト 中島 英子

歴史に学ぼう…………… 荘 司 雅 子 ……(4)

対談

「保育学」事始(その二)

守永英子／野田幸江……………(6)

「子どもの力」——についての迷信…………… 周 郷 博 ……(16)

幼児の内に潜むもの…………… 川 崎 千 束 ……(20)



子供の力……………増井光子(22)

幼児教育を考える……………千羽喜代子(24)

私の保育……………良知三恵子(30)

「生きる」という事……………小林暉親(35)

人間と動物はどこが違うか……………稲垣久和(40)

クリちゃんの動物園散歩(四)……………根本進(42)

笹原……………藤原正彦(46)

子どもと共なる日々……………松原和子(50)

保育の体験と思索……………津守真(54)

——子どもの世界の探究——(二十六)……………

史料紹介……………

『マイ・ダイアリー』③……………エリザベス・ギヤスケル
 笹川真理子訳(58)

編集委員 中村英勝・村田修子
 本田和子・豊田一秀
 編集主任 津守真・皆川美恵子

歴史に学ぼう

莊司雅子

同じ雌性卵から生まれてきているながら女王蜂は働蜂に比べて体格が大きく、寿命も働蜂の一年や数カ月に比べて四、五年も長いのはなぜだろうか。専門家によれば、それは女王蜂が幼虫時代に働蜂よりもきわめて豊富にローヤル・ゼリーを摂取するため、このような結果になるのだという。なるほど同じく摂取するにしても幼虫時代にしないと効果がないというわけである。

自然の発達法則というものは、まことに正直なものである。いやしくも地上に生を受けているものは、動物や植物に限らず、人間もまたこの自然の発達法則に逆らうことはできないであろう。人間の場合、幼児期に何を飲み、何を食べ、何を見、何を聴き、何に触れ、またどんな遊具で遊ぶかなどによってその後の生命の構造に大きな差異を生ずることは、心理学者や社会学者の調査統計をまつまでもなく、現実のわれわれの身近でたえず見聴きしているところである。とくに最近の多くの青少年の非行や自殺他殺行為、発達のいろいろな

ゆがみなどは、いずれもその原因を幼年期に多くもつていることでわかる。それもほとんどが、親や保育者や教師の幼児に対する理解の不足と、子どもの発達段階に即さないあつかい方からきていると指摘されている。今日の親や保育者や教師は、とかく性急に幼児に多くのものをつめ込み過ぎたり、逆に幼児期にあたえるべきものをあたえずに放任したりすることが多い。

このことについては、すでに一世紀半も前に幼児教育の重要性を強調し、世界最初の幼稚園を創設したフリードリヒ・フレーベルが、かれの著書『人間教育』のなかで世の人びとに次のように呼びかけている。「庭や野原や牧場や森を逍遙する人びとよ、なぜあなた方は自然が沈黙のうちにあなた方に教えているものを聞くために、あなた方の心を開かないのか」フレーベルは幼児期の保育や教育は、とくに自然の発達法則に従わなければならないと強調している。そして「世の親たちよ！早くから本性に反して礼儀や作法や仕事をおし

つけられ、そのために病的な不自然な姿であなた方のまわりをさまよっているあなた方の子どもたちが、果して立派に成長し円満に発達する人間になることができるであろうか」と問いかけています。

あらためて乳幼児の保育や教育のあるべき姿が求められている今日、フレーベルの幼児教育の理論と方法は、常に今日のわれわれが直面している問題に答えてくれる。歴史に学ぶべき意味はここにある。とくにこのことを私はフレーベル全集の翻訳を通して痛感している。玉川大学出版部から出ているフレーベル全集の第四巻の原稿を私は目下推敲している。

第四巻は『幼稚園教育学』であるが、これは四十年前に私が若き情熱を傾けて訳した未完成の原稿である。今あらためて一世紀半近く前に書かれたフレーベルのこの『幼稚園教育学』が、如何に今日のわれわれの保育や教育の問題に答えているかに驚いている。内容はほとんど乳幼児の遊びと遊具(恩物)の理論と方法であるが、いずれも乳児や幼児の発達に即した遊び方や遊具を提案し解説している。たとえば第六章の「遊具と子どもの遊び」では次のように書き始めている。「子どもの身体的な生命の維持と強化と発達のための最初の身体的な栄養は、子どもの消化器の発達と調和していなければなら

ないように、子どもの精神的生命の最初の保育や栄養もまた子どもの四肢、特に感覚器官の発達と密接に調和していなければならぬ」この精神的生命の保育のために、フレーベルは乳児から遊ばせる遊びと遊具を提案したのである。今日の保育や教育は、自然科学的な意味においてきわめて科学化されてきたことは大いなる進歩であるといえるが、保育の真髓に触れる点ではきわめて不十分であると指摘することができるといえる。その点で私は今こそあらためて真に幼児教育の本質を教えている歴史に学ぶべきことを痛感している。

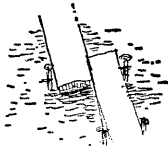
歴史に学ぶといえは、この度復刻された『幼児の教育』は、すでに私が推せん文に述べておいたように、これは単に過去のものであって今日のわれわれにとってもはや無用のものであるというものではない。それはむしろわれわれに明日への教育を考える資料をあたえてくれるものである。その点で復刻されたこの『幼児の教育』は、当時のわが国の幼児教育を知り、今日の幼児教育を考え、未来のあるべき幼児教育の姿を求めるときのよき指針であると思う。歴史はつねにわれわれに過去において成功したこと失敗したことを告げてくれる。その意味で過去はつねに現在に生きているのである。歴史に学ぶゆえんもここにある。

(聖和女子大学)

対談

「保育学」事始（その二）

—臨床と教育のあわいに—



守永英子

保育者
お茶の水女子大学
附属幼稚園

野田幸江

臨床家
愛育研究所

「子どもとひたすらに向き合う。」そこに臨床の出発点があり、到達点がある。そして、この点に関しては、保育もまた同様である。前回の対談は、この本質に迫ることで、絶えず重なり合い、その等質性を明らかにした。

ところで、前回のまともを読み直したお二人の語り手は、「当り前のことばかり」と感想をもらされた。確かに、そこに語られているのは、格別、斬新な発想でも、奇抜な方法でもない。当り前すぎるくらい当り前の、人と人の間に横たわる原理、原則ばかりである。

然し、これらは、すべて単なる理念として、或いは当為として語られているのではない。一つ一つが長年の実践を通して、全身で把握されたことがらばかりである。子どもと共にあった二十年の歳月から、したり落ちた経験のしずくなのだ。

時には、啓示のようにひらめく洞察として、時にはきびしい意識化への努力を通じて獲得されたこととして、お二人に獲得されたこれらの原則、それは、単なる書齋の学説ではなく、実験室の理論でもない。手足を泥まみれにしての実践が言葉のレベルに抽象され、体の底に沈澱して信念化されたものばかりである。そのゆえに、それらは、重く、確かなの

だ。

この経緯を的確に伝えるべく、文字は余りにも力弱い媒体である。今回もまた、お二人の「おしゃべりの続き」を文字化しながら、この制約の前に、もどかしさを感じざるを得ない。改めて言うまでもないことながら、実践の生命は、文字や言葉に置換し得ない。それは、あくまでも、生きて動く「実践」さながらにあるのである。

(本田記)

第四課

保育的臨床と臨床的保育

——前回のお話合いで、「子どもとひたすらに向き合うこと」そのためには、「自分が変ること」が重要である、など、保育と臨床に共通する根本原理が指摘されていた。お二人のお話をうかがっていると、保育と臨床の重なり合いが、ますますはつきりしてくるようですが……。

野田 実際面でもそうですね。私の臨床は、どちらかと言えば保

育的。保育臨床とでもいうのかな。それは、守永さんとのおつき合いで、保育から学んだことでしようね。

守永 何だかいい気持ちになってきたわ。(笑)

野田 障害児や何かの治療となると、どこかにゆがみがある対象の相手をして、そのゆがみをもとず、という発想でしょ。でもね、幼児を扱っていると、やはりそれだけじゃないみたいなのね。仮りに、いまは、ゆがみの矯正が重視されても、その間にも子どもはどんどん発達していくのだし、いまこの時期にして上げなきゃならないことが色々あるんじゃないか、そのチャンスが逃がしちゃいけないんじゃないか、って感じるのね。例えば、言葉が出ないとか、暴力を振うとか、色々あっても、言葉が出たり、おとなしくなったりするためだけの援助をするんじゃないかと、全体としてよく発達していくために、色々な援助が必要なんだってこと。これは、保育から学んだことね。臨床仲間から学んだことじゃないみたい。

守永 ゆがみを持っていても、子どもは子どもですものね。別に、子どもであることを止めて「ゆがみちゃん」になっちゃったわけじゃない……。(笑)

野田 そう。ただ、若干ちがうのはね、ここまでいってほしい、とか、こうなるべきだとか、そういう気持ちは余らないのね。

たとえば、保育者だと、もう一寸目的意識が強くて、何かやり始めると、これは、この道を通ってここまでいくのが当然、とかつて、到達点がハッキリしちゃうでしょ。私なんか、こうなったらいいんじゃないかって、一寸、力を貸して上げたりするけど、それが上手いかわかなくとも、別に、是非ここまでいかせたい、とか、失敗した、などと強く思わないのね。

守永 目的にも色々あるでしょうけどね。

野田 以前ね、小学生の臨床やってて、その時の体験なの。食事を全然しなくなっちゃった子どもで、牛乳だけ飲むっていうのね。それが、売店から買ってきた牛乳を、一口飲んで、「冷いからいらない」って、止めちゃったの。私は、そこで何が何でも牛乳を飲ませよう、と思ったわけじゃなかったんだけど、何となく、これっきりで終りにしたくないような気持ちがあったのね。それで、冷くてイヤなら、温めたいのかしら、ってわけで、「あっためようか？」って言ってみたの。

そして、二人で手で牛乳びんをかかえて、「あったかくナーレ、あったかくナーレ」ってやったのね。ところが、その子は、それで楽しくなっちゃって、牛乳を飲んだわけ。もち

ろん、冷いのをね。

これは、普通の臨床家だったら、多分、そのまま受け入れて「そう、冷いから飲みたくないのね」って、牛乳問題は処理するかもしれないわ。でも、「あったかくナーレ」なんて、二人でやってみるのは、明らかに、保育でしょ。守永さんから学んだものだという感じね。

これを、意識的に技法として使えば、「飲ますための技法①」とかつてなるでしょ。でも、私の場合、そういう感じじゃないのよね。

守永 もっと自然な、あなた自身の気持ちなんでしょう。

飲ませるための技法、というんだったら、いつでも「あったかくナーレ」が成功するとは限らない。いまの場合、相手の気持ちと自分の気持ちの中でそれが実った、ということね。

野田 それとね、その子は全然食事をしないんだから、牛乳を飲んだら栄養になるということはわかっているの。でも、私は、そのとき、飲んでくれても、或いは飲まなくとも、どちらでも同じ受けとめ方が出来る、という感じがあったの。

——そのところを、もう少し説明して頂けませんか？

野田 飲んでくれたらいいな、とは思っても、飲んだ方がよく

て、飲まないとダメとか、ガツカリとか、そういうのじゃないのね。飲むにしろ、飲まないにしろ、いずれにしろ、その子自身の選択ということで等価値なのね。その辺が、教育の人とのちがいがかな。

教育の方の人は、どちらかというと、飲むと飲まないとは、飲むのがよくて飲まないのはいけない、みたいに、結果に序列があるんじゃないかしら。

守永 どうかなあ。

野田 その辺のところは、聞いてみたいないつも思ってることの一つ。

守永 そういう場面に追いつめられたら、私はどう考えるかな？
飲むとか飲まないは、どうでもいいんじゃないかしら？ 子どもの気持ちに焦点を当てて、それがどちらに動くか、が気になるんじゃないかしら。

飲むか飲まないかに焦点を当てたら、その子どもの行為を受け入れるか、拒むかってことになるでしょ。そうじゃなく、行為はどうでも、どんなことをしても、その子自身を受け入れていく、という点では、同じような気もするけど……。

野田 でも、一般的には、〇〇をするのがよくて、それをしないのは困るんじゃない？ 教育の分野では？

守永 一般にはね、そうかもしれない……。

——確かに、一般的に、教育では到達度を問題にしますから、〇〇をした、〇〇に到達した、というのが評価されるようですね。そして、その結果として、〇〇をしないことが問題視され、劣等視されるわけです。

野田 でも、焦点を当てるべき部分は、そこだけじゃないでしょう。その子の気持ちが、どう動くか、というそこに焦点を当てる必要がある。それが、教育や保育への提言なの。

守永 その子自身を受け入れていくと、いつか、してほしいことをしてくれるようになることが多いみたいね。

野田 結果としてね。だけど、それを目的として、そのために受け入れるわけじゃないのね。受け入れること自体が価値だから……。

守永 最後には、目的があると思うの。例えば、食事をしない子供だったら、健康な生活のしかたを身につけてほしい、というような目的ね。でも、目先にそれをぶら下げて、食べさせたり、飲ませたりを課題にし、達成出来たか出来ないかに躍起になったら駄目でしょうね。そんなに短絡的なものじゃない。

野田 守永さんの面白さはそこね。やたら「ねらい」なんて言わ

ないで……。

一般的には「ねらいねらい」なんて、やたらねらって、それを上手くやるのがいいみたいでしょ。猿回しとお猿さんみたいな気がして悲しくなっちゃう。躍らせている方も自覚がないし、躍っている方も自覚がないんですよ。

守永 健康な子どもって、大多数が躍ってくれるんですけど。だからこわい……。

私の場合は、昔から、保育者のやろうとすることに、そっぽ向いてる子どもの方の気持ちに興味があったのね。何とか、これをさせようと行為のレベルで考えるよりも、その子の気持ちが面白いな、どう変るのかなって……。

野田 あなたの級に、そっぽ向いてる子どもなんている？

守永 いるでしょ、そりゃ。(笑)

余り、まとめようとしないうし、まとめる力もないから、目立たないかな。(笑)

第五課

子どもとの間で、大切にしたいこと (保育内容論)

——子どもの気持ちはどう動かか、つまり、自分自身に

も、周囲の人々にも肯定的な関係を結んで、積極的に生活していこうという方向に、子どもの気持ちが開かれるか、否か。そこに焦点を当てて、その気持ちの動きを作り出すのに手を貸そう。

保育とは、まさに、そういうものかと思えてきました。ところで、一般には、保育内容とはこれとこれとこれである、というような考え方がありますね。そういう点では、どうお考えですか。

守永 そこが、正直言って悩ましいのね。私の中で、上手く構造化出来ないところもあるの。昔の保育を引きずっている部分もあるし……。

もちろん、いまは、子どもの気持ちを大事に考えていますけどね。

それを話題にすると、いつも野田さんには、「いいじゃない、幼稚園で何も覚えなくとも」なんて言われちゃうのね。

野田 肯定的に生きていくことの出来る子どもなら、必要なときに、必要なことは覚える筈よ。それでいいんじゃない？

守永 それが渦中にいる人間と外にいる人間のちがいがいかな。やっぱり、どこか、一寸、ちがいのよね。

私も、何か覚えさせたり、色んな領域的な経験を体験させ

たりすることをそれほど大事に思うわけじゃないの。時には、そんなもの、どうでもいいと思うこともあるのね。もともとと大事なものがあるから……。

でも、その半面、領域的なものを捨てるなら捨てるだけの理由をきちんと言えなきゃいけない、なんて思うの。「どうでもいいじゃない」なんて、サラッとしてはられない……。

野田 「捨てるひまもないくらい、別のことが忙しいので」ってのはどう？（笑）

守永 そうなの、まさにそう。（笑）

私には、いま、こっちが大事で、こっちで手一杯です、って感じ。

野田 私ね、六領域とか八領域とか、そんなことよくわからないし、どうでもいいみたいな気がする。

ただね、こういうとき、こういうこととして上げたらいいかな、ってことはあるわね。子どもとの関係の中で、いま、こういうことが大切かなって。

守永 そう。私にとって、それが保育内容なの。でも、そうなる、と、余りにも一人一人違いすぎるのね。それで構造化しにくい。の。

野田 その子との間で、何を大切にし、何をしっかり植えつけた

いかということ、一人一人ちがうわね。子どもによってもちがうし、保育者によってもちがうし……。

守永 例えばね、子どもが幼稚園の庭の真中にある桜の古木に登ったとするでしょ、その時、それをどうするかなんてことも、保育者一人一人で、ずい分ちがうのね。

ある人は、そのまましておく、つまり、子どものすることとは、何でも許容しようというのね。別の人は、「その木は古くて、折れると危いから、お止めなさい」って言うでしょ。

私はね、「折れると危いし、それにみんなが大事にしていく木だから」と言って止めると思うの。それは、止め方のテクニクじゃなくて、やはり、その子との間で大切にしたいことの一つだから……。

「折れて危い」というのは、その子自身のことでしょ、「みんなが大事にしている木は折らない方がよい」というのは、木へのいたわりだし、みんなの財産とか、美しいものの価値とか、つまり、自分以外のものへも、目を向けるってことを、子どもとの間でやはり、はっきりさせておきたいの。仮りにその時、子どもには、わからなくともね。

子どもの中で、「大人が生活している」ってことの意味は、

そういうところにもあるって私は思うから……。

第六課

「知ること」と「とらわれ
ること」

——子どもの大切にしているものを受け入れると同時に、

一人の人間としての大人にとって、本当に大切だと思えることは、両者の間でやはり大切にしていこう、ということでしょうか。

それにしても、よほど、一人一人について、深く知っていないといけないわけですね。

野田 そうね。だけど、知っているということと、それで上手くやれるということは別みたい。知っても、役に立てられないこともあるし……。

守永 子どもとの出会いは、瞬間瞬間ですものね。

野田 時々、ハッとすることがあるの。子どもの過去、生育史、特徴などをよく知っておくということは、それにとらわれるということじゃないのね。だけど、知っていると、つい、それにとらわれちゃうの。

たとえば、この間も、すぐ外に飛び出す子がいてね、その

子は、すぐ飛び出すんだと知っているわけね。すると、それにとらわれちゃって、その子が立ち上ったりすると、すぐ、外へ出さないよう身構えたりしてるのよね、自分自身が……。だけど、その子は飛び出すんじゃないくて、自分でこぼしたものを拭くために、雑巾を取りにいったんだって。

「ああ、しまった。はずかしい」ってしみじみ思ったの。そんな時「知ること」と「とらわれること」は別なんだなって、実感としてわかるのよね。

守永 いつか、そのことで、お電話頂いたわね。「一つ、わかったわ」って。

野田 そう。私にしては、一つの洞察だったのね。でも、やはり、時々、とらわれている……。

知ることは必要ね。いつもいつも第一目と同じじゃ積み重ねの意味がないから、生活がくり返されれば、それだけ深く知ってなきゃならない。でも、「知って、なおかつ、とらわれない」とは、どういうことなのかなって、この頃考えてるの。そのこといつもいつも考えてるって感じよ。

——確かに、その子どもことがわかってくると、自分の把握に即して予測をしてしまいますね。例えば、衝動的に乱暴することがあるという把握があると、その子

が一寸ものでも持ち上げると、すぐ、「ア、投げつけるな」なんて身構えてしまいがちです。でも、そんなとき、とらわれないで動くって、どういうことでしょう。

野田 そこらへんって、とても難かしいけど、とても大事なところね。

いまの例でも、「ア、投げるな」って身構えると、その子は投げるつもりなかったのに、逆に、誘発されて投げつけたり……。さっきの例でも、雑巾を取りに行つたのに、こっちがなまじ動いたため、外に飛び出したくなっちゃうこともあるし……。

守永 そうねえ。大人が、子どもにそうさせること多いのよね。

野田 だけど、その子が外に飛び出すという事は、知ってなければいけないのよ。

守永 いま、私の級にね、部屋の中に砂利を投げこむ子どもがいるの。部屋がいつも砂利だらけ……。

この間ね、帰るときで、みんな帰り仕度して椅子に腰かけたの。その日、作ったものなんか持ってね。その時、その子が、砂利を一杯持って、こぼしながら入ってきたんです。私は、一瞬「アッまた投げるのかな」って思ったのね。やっぱり、そう思いこんでいたのね。

でも、次の瞬間、ふと自分の気持ちが変わったの。そして「これ、持って帰りたいのね」って、声をかけたんです。すると、とかく、こちらの言うことの反対ばかりしがちな子なんだけど、「うん」って言うでしょう。「ビニールの袋に入れる？」って聞いたら、「ビニールの袋、ちょうだい」って言うんですよ。こちらの言うことを、そのまま受けて、そのまま口うつしに応答するなんて、とても、考えられなかったのよ。少くとも、私のその子に関するイメージの中には、なかった。

野田 また反抗するとか、そういうことだけだったのね。

守永 そう。いつも反対して、いたずらばかりしているものだから……。

そこで、ビニールの袋出して上げたら、それに砂利をつめて、持って帰ったの。「また投げる、困った」なんて思っで、「捨ててらっしゃい」って言ったら、その子のそんなところ、見えなかったでしょうね。

だけど、その時、どうして、フツと気持ちが変わったかなんて、自分でもわからない。「持って帰りたいんじゃないか」なんて、どうして思ったのかしら、ね。

野田 それが、経験という巨大な氷山の一角なんじゃない？ 現

われてくるものは、ほんの針の先ほどだけど、下にかくれてるものは、大きいのよ。

守永 やっぱり、いつも、どこかで、その子のことを考えてるんじゃないかな。何も考えてなければ、「お庭に捨ててらっしゃい」なんて、簡単に言っちゃったでしょうね。

野田 そうよ、いつもいつも、どこかで考えてるから、ある瞬間が生きるのよ。決して、偶然じゃないわ。

守永 その子と私の気持ちのつながりが薄いから、どこかでつながりを持ちたいと願う気持ちが根底にあるんでしょうね。だから、向こうから気持ちを重ねてこないなら、こっちから重ねて上げて、「他者と気持ちを重ねることの快さ」みたいなものを経験させて上げたい、そうして、向こうも気持ちを重ねようと試みるようになってくれたらって、どこかで考えていたんでしょね。

野田 ねえ、「ビニールの袋に入れる?」「うん、ビニールの袋でしょうだい」なんて見事よね。

それこそ、共感というやつよ。ねえ。

守永 でも、後から考えてみるとね、あの子は、本当に砂利を持って帰ったのかしら、本当にビニールが欲しかったのかしら、って思うのよ。(笑)

野田 そりゃ違うかもしれないわ。きっと違うでしょうね。

でも、「砂利捨ててらっしゃい」と言われるだろうと感じてたところに、それが肯定して貰えたわけでしょ。その子にしたらって、持ってはいるけれどどうするというのがもなく、投げつけるとか、ばらまくとかのエネルギーもなく、何とないニュートラルな状態だった。だから、持って帰りたいとハッキリ思ってたわけでもないでしょう。

でもね、そのニュートラルな状態をプラスに動かすか、マイナスに動かすかは、ものすごく違うんじゃないかしら。

守永 そうね、それは、その時だけのことじゃなくて、今後、二人の関係を作っていく布石になるわけね。

ニュートラルな状態をマイナスに動かす、つまり、砂利をばらまく方向を誘発してしまえば、私は、それを否定しなきゃならない。「お部屋にまかないのね」とかって。ニュートラルな状態って、どちらの可能性もはらんでるから、まさにチャンスってわけ。(笑)

野田 そう。一触即発ってわけ。大人の動きですごく変るのよ。プラスの方に変わって、よい関係の土台になるか、マイナスの方に変わって、また怒らなきゃならないか……。

——子どもがその時、何をしたいと思ってるのか、それ

がピタッとわかるという事は、仲々、あり得ないわけですね。そういう意味で、同じことを考えることが、共感じゃなくて、同じ方向に動き出せるような心の状態になることが、共感なんでしょうか。

野田 そうだと思えますね。「砂利を持って帰ろうと思っていたか、どうか」は問題じゃなくて、その後の動きがピタッと一致し、二人が協動的に動くという方向が重なり合ってるわけですよ。

守永 その瞬間に、パッと接近出来たみたいな喜びが、私にも相手にもあるみたいだし……。

野田 考えていることの意味までピタリ同じじゃなきゃ、共感じゃない、なんていうのは屁理屈だと思うわ。そんなこと言ったら、大人と子どもの間には、共感なんて無いってことになりかねないでしょ。でも、「サア、お止めなさい、捨ててらっしゃい」とかって、マイナスの刺激ばかり与えて平然としていられる大人と一緒にいるのは、大きなちがいですよ。

「共感なんてあり得ない」なんてスマシテる大人と、「何とか気持ちを重ねたい」と思ってる大人とじゃ、子どもの育っていく方向がちがうと思うわ。

守永 大人のいる意味ってそこかしら？

野田 そうよ。「お部屋の中に砂まいちやダメ」って教えるのが、大人の役目じゃないと思うの。

守永 あなた、文部大臣になるといい。(笑)

野田 私、いつか、そんな話をしたら、「子どもの相手ってそんなに大変なんですか？ 止めたくなった」なんて言われちゃって、困ったことがある。(笑)

守永 大変だからって、みんなに止められても困るし、かといって、大変さに気付かないで、のんきにやっているのも困るし……。(笑) 大変なことを自覚しつつ、厳粛なる日常生活を楽しくやっていくってことかしら。

—— 厳粛にして、当り前の日常生活というわけですか。それは、臨床家や保育だけの問題ではなく、親たちはもちろんのこと、大人すべての共有すべきことがらかも知れませんね。子どもの社会は、子どもを含んで構成されているのですし、「子どもと共にある大人」として、常に「厳粛な日常生活」を送っているわけですから……。

今日は、このあたりまでにおきましょう。

記録 皆川美恵子
文責 本田 和子

「子どもの力」——について の迷信

周 郷 博

「子どもの力」という標題で短い文章を書くことを求められた。まったく無神経、粗雑な注文をしてきたものだと思われ、気が持たなかったが、思い直してみると、あの「学力」という——それがないとこの世間から「落ちこぼれ」と見做されて弾き出されてしまう「恐怖」にかられて、どこの親たちも早く「身につけさせて」やりたいと「思っ」て、いる「競争力」や「学力」への執心——そういう底流があって、こんな奇怪な発想がでてきたのだらうと得心した。

十二、三歳までの子どもの世界——とくに未だ幼い子どもたちは、ほんらい未だそういう喰うか喰われるかといった「おとなたち」の情容赦のない競争角逐——駆引きの世界に住んでいるはずではなかった。そういう焦立った狭い我執我

欲、自分たちの目の得しか目にみえず、味わいも、人生の深い意味も感ずる暇もない世界へ無理無謀に子どもたちを引きずり込んで、「人生というものを暗くし「生きがい」の火を消し去った「報い」が、このごろ特に異常に多発している子どもの自殺や犯罪、家庭内の怖しい暴力、殺傷事件を招いているのである。神谷美恵子さんの『生きがいについて』の「序のことば」に「人間がいきいきと生きて行くために、生きがいほど必要なものはない……それゆえに人間から生きがいをうばうほど残酷なことはない、人に生きがいをあたえるほど大きな愛はない」という一節を読んだとき、私は幼稚園や学校がこうした感覚、価値観を少しでも持ちあわせているなら、子どもはいまとは全く違ってくるだろうと思った。ところが、学校や幼稚園は、口ではなんと理に合ったことばをならべても、変形して「迷信」に近い、すでに異常なあの「競争」に加担して、「共犯者」といっていい恰好になっているのである。「人生」というものも「人間——人間というものは、子ども」にその本体が宿っているはずだが」というものも、そんな「ちっぽけな」「ひねた」「おとなび」で畏縮した」ものではなくて、もっと大きな、視野のひらけたものなのに、子どもたちは、そうした「人生」や「人間」を感得し励まされる機会をほとんどもつことがなく「奪い去られ」

て、生れてきて間もない四つ五つの年齢で、もう、いちじるしい早期老化現象が影をひいている。有吉佐和子さんが聖人のように敬慕している奈良の医師梁瀬義亮さんは、いまの化学肥料や農薬、温室でそだてられた野菜は、「野菜の顔をしてはいる」が、あれは「野菜（自然の恵み）ではなくて、工業製品だ」といつているが、いまの子どもたちは、気の毒に生れてきたと思つたら、もう、早目にさういう「人間の顔をした」工業製品」と見られているのか。画一化されて、きちんと並べられたスーパーのナスやキュウリのように——。大不幸Ⅱ惨害 (Disaster) が降つて湧いてくるのは目に見えている。

そんな狭いひねた「子どもの力」についての迷信の気味わるさを考えてみているうちに、私は、古いといわれても未だ素朴だった、私の七つ、八つの子どものころの情景を思い出した。

そのころの私が育つた山里の村は、まだ電灯が入らずに、ランプの生活だった。ランプの灯りで、何やら「長い一日の終り」の夜というものが家々に点つた。ランプの火屋につい

た煤すすを手にボロ布をもつてきれいに掃除するのは、夕方の子どもこどもの「しごと」だった。よごれた火屋に手を突っこんでクルクル掃除するには、子どもの手と手首はちょうどよい大きさで、おとなが棒の先に布を巻きつけて（おとなの手は大きくて入らない）掃除するぶきつちょうさより、ずっとまじだつた。そのころは、いまはもうそのことばがまるで実感を失くしたが、まさに「夜の帳とまりが降り」て、野も川も林も家々も「陽が落ちたあとの暗闇」に一面につつまれて、一日の（平安な終りがきた。風の音が暗くなった森にざわざわと吹きつのがついたり、雨が降りだしたりしたそんな夜は、うす暗い灯りだが、ポツリポツリと家々に点される灯りが夕餉のかりとともに、子ども心にも「家こいしさ」をさそつた。——そんな素朴なランプの灯りの下で、「しごうを踏む」とか「仕切りなおし」をする……そんな大げさな仕事をやっては、父親と相撲をとつた。たまたま勝つたりすると（双葉山のような？）セキトリになれるゾ」なんて家族そろつてそんなことと興じて短い夕べのひとつきをすごした。七つ、八つのころ、ただ単純に「子どものからだができていく——力がついていく」ことを「よろこんだ」そんな昔が、懐しく思ひだされたのだ。

そんな七つ、八つより少しまへ——四つ、五つのころか——

これはかなりハッキリと記憶されているのだが、道を距てた前隣の床屋のオバアちゃんと母と、そこへ小さな私がちょこんといっしょに、冬の炬燵にはいついて、私はこの二人が声をたてて読んでいる講談本の「塩原多助」の「愛馬の青馬」との別れを惜しんで故郷を出るくたかりを讀むのをただほんやり「つき合って」いるふうに聞いている、とつぜん声をあげ涙をほろほろ落して泣いた。いまもその実感がかすかに残っているけれど、そのとき床屋のオバアちゃんが「感じ入った」ように、どんなことばで二人がいったのかは忘れたが「カンシンな子だよ」と、「いい見つけもの」でもしたように話していたあの少時を思いだす。そんな、子どもの内から「花開く」ようにして「育って」くる「情緒（感じる心）」も、子どもの力―内発的な力というものの中にいれられるだろう。

そういう年齢よりも少し前、三つ、四つのころのことだが、これは自分ではもうまるっきり「憶え」がないのだが、昔は家の前に「掘り抜き」井戸があつて、水がボゴボゴと湧いて、井戸枠の切り口からいつもちょろちょろと流れだしていた——小さな私は、バケツを手にして井戸の中の水を汲んだはいいが、バケツいっぱいに入った「水の重さ」に引き込まれて、逆さに井戸の中へのめりこんでしまったらしく、小

さな足の先を井戸の枠に「のぞかせ」たかっこうで頭からすっぽり井戸の中へ落ちてすっきり「水をのんで」いたらしい。そこへ、昔はよくどこにもいた「バカ」——いつもニコニコ笑つて、婚期も逸した女がいたものだが、その人が通りかかつて、井戸枠にちょこんと足の先をのぞかけて死にかけていた私を救い出してくれたらしい。昔は、子どもが、ちょっとした病気や事故などでよく死んだものだったが、子どものそうした生命の「脆さ（無常）」というものが背景にあつて「生きていく」ために「恵まれる（発現してくる）」その子どもを、人は賞で、よろこびにしたと思われる。その三歳にまだ達しない一九一〇年に、あのハレー慧星があらわれて、太陽がそのハレー慧星の尾の中へはいると、昼間なのに、周りが暗くなつて「空に星がゾロツと出て」やがて、夕焼の空へ尾を引いて沈んでいったという話を、私は母からよく聞いて、その情景が心にはっきりと焼きついていゝる——が、前の、井戸に落ちて殆んど死にかけた経験といっしょに、あとになつて「母から聞いた」話と「一つに交り合つて、それが恰かも「自分がほんとうに経験し」「見た」ことのように、「記憶」にとめられ（蓄積され）ている。こうしたことから考えてみると、三歳前後までの子どもの経験や「見聞きしたもの」（幼いながらの自然を見る目や社会を見る目）は、次

第にそのからだと心に拠って発現してくる「からだ、と心の力」「感受性」「もの見かた」の成熟といったものを含めて、このごろの流行語でいえば、子どもたちひとりひとりのアイデンティティーというものは、周りの——母の（或いはそれにとつて代る役割をしている者）の「ことば」や「話」語りをそこから外してしまったのでは成り立たない、ということができると思う。——この点で、いまの幼い子ども——三歳前後までの子どもの育ち（教育）は、たいへんに大きな過ちを犯していることに気がつくはずであり、その年齢までの幼い子どもの心をマリヤ・モンテッソーリが「アプソールベント・マインド（吸収する心）」と呼んだ卓見にいまさらのように敬服させられる。周りの環境、道具や棲みかた、子どもをとり巻くその人たちの行動、眼差し、語り（心のはたつき）と一つに「融け合った」かたちで、子どもは最初に自己のアイデンティティーを自分自らつくりあげていくのである。歌わない、語らない——「物語り」をしない母が多くなつており、「食わせて」「着せて」「勉強させて」せかせかと幼稚園などに出入りしてはいれないというのか。子どもの力（ポテンシャル＝潜在力）は、すでにこの三歳前後にその骨格が出来あがるわけだが、そこがすでに大へんに「頼りない」「不安定」な状態のまま経過していくのである。その

あとに「ひかえている」幼稚園、学校、これは社会、生活、家庭とともに、子どもたちの内発的知的な創造性が伸長していくのには、どれもこれも「時代遅れ」というか、「がらくたな機械仕かけ」というか、ほんとうにお粗末をきわめた制度という「化けもの」に近いのだ。それで「古いといわれても」素朴だった昔の——「見つけもの」のように子どもが「あらわしてくる」力、「無理をしない」内発的な力を賞でそれを「よろこんだ」昔が、私には懐しく思ひだされたのである。

三歳ごろに「もうけもの」のように子ども自身の内部に生れてくる、あのすばらしい「秩序の感覚」(Sense of Order)、「正直とか、美しいもの醜いものを見分ける感覚」、「隣人の愛」のようなものまでが——そうしてどの子ども「人間になる」ための「学習」(何がやれるようになること)が好きなのであり、おとなとちがつて、ジャン・シャトーがいったように「子ども——それは自己を超えて生きる」つまり「未完成な自己を完成して」おとなたちが死んだあとに人類を完成しようとして「生きている」唯一の——かけがえのない存在なのである。健康な野菜と同じように、これも「時」というものにかたつていなければならない。「天の下のすべてのことには季節があり、すべてのわざには時がある」(伝道の書三・1)

幼児の内に潜むもの

川崎千束

幼いひとにかかわっていると、その心の底に、驚くばかりの深いもの、鋭いものを内包しているのを感じします。また、それを感知することによって、保育者の心も深まり成長してゆく事実を、現場の方々なら誰しも味わわれたことでしょうが、今、私は自分の経験の中から、二三の例を抜粋して幼児の内に潜むものを、再認したいと思います。

例(一)

七月の水に親しむ頃、年少組の舟作りの一群のために、必要な材料を数種取揃えておきました。ほとんどの子が、それらの素材に取り組んで、各自のイメージに近い表現ができたのか、喜々としてプールの方にかけてゆきました。独り残っているKに近づくと、力つきたという表情で、「何度つくり

直しても、浮いてしまうの」「それでいいんじゃないのお舟ですもの」「だけど僕のは潜水艦なんだもの」ああそうか、潜水艦があるんだった！ 保育者は、用意した浮上る材料ばかりを改めて見直して、言葉に窮しました。

傍に寄ってきたMが「舟の底に穴をあければ沈むよ」と事もなげに言うと、「それじゃ、浮上らせたい時、駄目じゃないか」

結局、Kの熱心な試行錯誤の末に、油粘土をまるめて、針金で舟に固定して、その重みで舟を沈め、浮上らせる時には、錨を上げるように粘土のかたまりを持上げるという原始的方法ながら考案し、潜水艦は完成しました。

自ら興味をもって潜水艦つくりに挑み、試行錯誤を重ねて、油粘土の錨をつけて舟を沈めることを遂に発見した、このKの心奥に育った深いもの鋭いものが、発達につながってゆくことを考え、このエネルギーが保育者の心の波長を高まらせ充足し、共々成長してゆくのでしよう。

例(二)

ある夜、「歯が抜けたから、べれすねずみに手紙を書くので素敵な封筒が欲しい」とHの要求です。小学二年生になっても、まだ、べれすねずみを信じているのかと、Hの幼なさ

を感じながらも、「サンタクロースっているんでしょか」と新聞の社説の委員に質問した少女も、同じ八歳だったことを思い出し、この年齢では、まだ幻想が残っているのだろうと封筒を与えました。手紙を書き終えた封筒を、「これ、枕の下におくと、べれすねずみが持つてってくれるんでしょ」と念をおした。翌朝、浮かぬ顔をして現われ、「封筒をべれすねずみが持つてかなかったよ」と。私は「しまった」と困惑しました。枕下から封筒を抜き取っておくよう母親に依頼するのを忘れたからです。

「僕がちいさかった時、歯がぬけて手紙を書いてくれた時に、べあすだったかな、べれすだったかな、って迷っていたでしょう。こんども間違えたのじゃない?」「いえ、べれすねずみに間違いないし。あなたのべれすのべの字が、はっきりしなかったのよ」八歳の彼は、おとなのごまかしの虚言を、素直にうけて封筒の上書きを丁寧に書き直しました。

彼が三歳の時、何かにぶっつけて抜けた歯を、鼠に托す童話をしながら、「べあすだったかな、べれすだったかな」と曖昧なことを言ったのを、鮮明に記憶していて五年後の八歳に持ち出したのに驚かされました。身体の一部である歯が抜けた一抹の不安が、鼠に托すというユーモラスな転嫁によって

救われた際の、おとなの言葉だったから、かくも鮮明に記憶しているのでしょうか。おとなの測り知れぬデリケートさを幼児は秘めているのを知るとき、おとなには畏怖の念がおこります。

例(三)

年長組の保育室で「ねずみのがっこう」定価六五〇えん、菅原充さく・え、という、たどたどしいながら微笑ましい絵物語の本をみつけ、手にとりました。最初の頁には鼠らしい絵があつて、

ねずみが公園に遊びに行き、そこで箱をみつけ、その箱は魔女が仕掛けておいたものです。とファンタジックなものでしたが、読み進んでゆくと、鼠は姿を消し、自分が学校へゆく一日の生活が——絵とともに記してあります。

朝はパンです。歯がぬけたので甘いものは駄目で、バターをつけて食べました。割算の宿題ができました。宿題をするのを忘れたけれど、お母さんも知らなかったのでおこりませんでした。

兄姉もなく独りっ子なのに宿題だの割算だのと切ないほどの学校への憧れが描かれています。「ねずみはどうしたの」などというひとがいたら、心貧しい憎い大人です。

子供の力

増井光子

赤ン坊といえは、誰しも小さくて無力で頼りないもの、という印象をもちます。確かに赤ン坊は、大人の保護がなければ生きてゆけません。しかし、赤ン坊は時に素晴らしい生命力を発揮することがあります。

弱いものというと、老人・子供というようによく並べて考えられます。両者とも社会全体の保護が必要とされるのですが、そこには大きな一つの差異があります。それは、老人の場合は、身体の組織がもう衰えてゆく一方なのに、子供の力はこれから伸びる力が十分にあるということです。

動物園で多くの動物たちと接する時、私たちはやはり老獣や幼獣の飼育に気を使います。でも、子供の場合は、溢れる躍動力を十分に発散させてやる心使いも大切です。例えば、

老獣の場合は、冬などは暖房した室に收容したままということもありますが、子供の場合これは余り良くありません。

少々寒気にあてても、広い運動場で走りまわらせ、足腰を鍛えた方が良いのです。多摩動物公園には、ライオン、キリン、チンパンジーなど、アフリカ産の動物が沢山います。アフリカは一般の予想に反して、地方によってはそう暑苦しいところではありませんが、それでも氷点下になることはまず平地ではありません。

ところが、動物公園では氷点下十度以下になることがあります。年に何回かは雪もふります。しかし、そうした中で、今年の二月五日には五十三頭目のキリンの子が生まれました。このキリン児は、二週間もすれば、母親と共に群生活に入つてゆくでしょう。

子供は元気に溢れ、跳んだり走ったり、とてもジツとしてはいられません。その活発さのせいか、骨折というような事故も時々おこります。でも、身体の組織は修復力が旺盛で、すぐに恢復してしまいます。以前にアメリカバイソンの子供が、うしろ足をポッキリ折ってしまったことがあります。

骨折の治療には、副木をあてて動かさないのでおく方法と、骨の中にステンレスのピンを通して固定する方法がありま

す。成獣の場合は大い、この後者の療法が用いられますが、幼獣の骨折の場合は副木法が良いようです。骨と骨とがほんの一すくつついてさえいれば、造骨作用がおこり、みる間に骨を修復してゆきます。そんな時、多少副木をとったあと、曲ってくっついていても心配御無用です。毎日走りまわっているうちに、自然とあるべき肢勢になり、一体この骨が折れたのかと思うぐらいになってしまいます。

他にも病気で、本当に強いなあと感心してしまったことがあります。それはキバノロという小型のシカの場合です。シカといえば誰でもすぐ枝分れた角を想い浮べますが、キバノロには角はありません。代りに犬歯がキバ状となって口外に突き出しています。

このキバノロは六―八月にかけて一―三子を出産するのですが、この頃は雨の多い時期です。

この時も、出産当日は晴天だったのですが、夜半から雨になり、それも相当強く降りました。シカの子は産まれると、自分で隠れ場を探して蹲り、親がくるまでジッとして動かない習性があります。

誕生直後の子を人が不用意にいじると、人の臭いが移って、親が面倒みなくなる例が多いので、普通、子の世話は親

まかせです。ですから、この時もオスのキバノロの子は雨が降ってもそのまま坐りつづけ、すっかり体が冷え切って、翌朝様子をみにいった時は、仮死状態になっていました。しかし、その泥だらけのボロ雑巾のようになってしまった子は、お湯で洗われ、フ卵器の中に入れて暖められているうちに、息を吹きかえし、立派に成長して、甦った男の意味でアゲインと名付けられ、その後七年も動物園で暮らしていたのです。

また、以上のような身体的な生命力の強さの他に、創造力といったものも子供たちは有しています。ニホンザルの社会では、群によって一種の風習というようなものがあり、それが次代へ伝承されてゆきます。この新しい習慣の創始者は子供のことが多いのです。

子供たちは好奇心からさまざまなことをしますが、それが動物社会にとって有益な事柄の場合があります。新習慣は、遊び仲間の間に広がり、やがて母親に支持されて、以後急速に群の風習として定着してゆくようになるわけです。体はたとえ小さく体力的に大人に及ばなくても、幼いものには柔軟な逞ましさがあり、社会を変える原動力があると、つくづく感じさせられます。

(多摩動物園)

幼児教育を考える

千羽喜代子

一、はじめに

岡政が倉橋惣三の主張とする「幼児の自然の生活形態のまま」で保育を行なうことが現実に可能なことを実証しようとし、「すべての形式的束縛を幼稚園から取り去る」ことなど四つの用途を提案してから、約五十五年の歳月が流れている。

当時の倉橋理論の進歩性に対する保育界の受け止め方は、まさに現在の informal education の受け止め方に共通性を見出すことができる。歴史は循環しているという感が深い。

すなわち、一つの保育室が一つの城であり、一人の保育者が城の主である現在の幼稚園に、幼児の生活に保育の目的を近づけて

いく、子どもの生活を中心において保育を考えていく方向づけをすることは、現代流の用語をあてはめるならば、informal education（現在の制度化された学校があるのに対して、インフォーマルな教育の役割を見失わないということから、それを教育の重要な観点としている）とも言えると思うが、五十五年を経過した現在においても、なかなかその実現は容易ではない。

それは、大局的には現在の教育界あるいは保育界の主流となる教育理念あるいは保育理念に依っていると考えられるが、保育実践の場においては、次のことからも考えられる。

● Open mind を養う

「開かれた心」とでも訳せばよいであろうか。私をも含めて、一つの固定概念が出来上ってしまっているときには、物事の解釈や見方がその範囲を出ないことがある。同様に、すでに十年以上にわたって保育実践の実績を持っている保育者の保育理念を変えることは容易ではない。

自分自身の中に、自己変革の要求がある場合は、自分から求めていくという積極的な態度が生じ、変革のための努力をする。しかし、自分の中には、さして要求がない場合には、与えられるものに対して、すべて受け身であり、しかも、批判的であるばかり

でなく、自分の保育を肯定的に考えようとする材料にすり変えてしまいがち。

開かれた心は、とらわれない心から出発している。しかし日本人は、とらわれない心を保持することが難しい社会環境の中に置かれているといわれている。

開かれた心の原型は、何時の頃に形成され、そしてまた、その心は、何時の頃からとらわれた心として閉ざされていくのであるうか。

● 親が期待する保育

もう一つの問題点は、親が幼稚園に期待しているところの保育内容及び指導である。それは親が期待する教育のねらいにつながっている。

例えば、「子どもの自主性を育てる」、あるいは、「子どもの成長力を信頼して、ひとりひとりの自主性を育てる」という保育理念に賛同して入園させていても、それは「たてまえ」として賛同しているのである。自分の子どもに目をむけたときには、その「たてまえ」はもろくも壊れ去ってしまい、親の欲望が表面化してくる。

親の大部分の者は、幼稚園を小学校のための準備段階と考えて

いる。したがって、小学校に入学して困らないようにという要求が幼稚園に対してむけられ、小学校教材のための準備教育を要求してくる。

● 子どもの内面の躍動に関心を向ける

一般に、親や保育者に認められる共通性は、子どもの外側に現われた行動や能力に評価の目がむけられることである。それは、知識であり、社会的適応である。

これらのことからは、幼児においても、また、その後の生活においても要求され、期待されるところの能力であり、行動であるが、これらの能力や行動が一つのパターンとして子どもの枠ぐみとなり、それが人間の存在として、最も重要であり、かつ基本となる内的な躍動力を抑圧するならば、それはむしろマイナス要因とさえなる。

例えば、社会的適応の側面である基本的生活習慣の自立が幼児期の発達課題と考えられ、保育のねらいとしてとりあげられていることが多い。このことは必要なことではあるが、幼児自身が必要性を感じて自発的にしようとしているかを確かめる必要があらう。

幼児が、自発的に自分の力を出し切って活動し、生命力に満ち

あふれている姿に目をとめ、そこに価値を見出すことのできる保育者の存在を確認していかなくてはならない。

この問題を解決することは、これからの幼児教育を方向づける大きな鍵になるのではないかとさえ考えている。

しかし、生命の躍動ということは、数量で表わすことが難かしいだけに、他人に伝えたり理解してもらうことは容易ではない。それは子どもと大人との共感的理解を通して把握されるといっても、共感的理解を自己体験の中でとらえていく技術を体得していかななくてはならない。つまるところは、子どもの見方の変革が要求されるのである。

二、幼児教育の基本

辻村ジュサブローという人形師が、「自分が人形プロデューサーとして現在にあるその原郷は、幼児期の体験にある」と述懐していたのを聞いたことがある。幼児期に体験した広い満洲の原野に沈んでいく落日の太陽への感動は、何故か自分の創造活動の世界の原郷になっているのであると。

同じようなことは、柳田国男にもみることができる。宮崎修二⁽²⁾朗は、「柳田の学問の源流は、たしかに幼少年期の体験には違

ない。その流れの方向は、柳田を通じて『原郷から学問への流れこみ』と、『その学問は原郷への記憶に溯る』という、はげしい振幅と環流の上に成り立つ」と述べている。

たまたまこの二人が目にとまったのであるが、幼児期に体験した感動が、その人の生き方を左右するほどの影響力があることを知ったとき、幼児教育にたずさわっている者として、一体幼児の何に着目して保育すればよいか、将来の人間性につながるどころの幼児の経験や活動は何か——という極めて重大な、そして、基本的な問題に直面したのである。

最近では、保育のねらいに幼児期の発達課題がとりあげられ、発達課題を達成させることを主な目標としているむきもある。

しかし、発達課題の達成を云々する前に、もっと大切に受けとめていかななくてはならないものがあるのではないか。それは、「感動すること」であり、「自発性の尊重」であり、「興味を育てること」である。これらは事新しい内容ではない、幼児教育の基本として、ごくあたりまえのことである。また、幼児自身の体験と保育者の援助からの二つの要素が混入しているという難点があるが、私なりに考えてみたい。

● 感動すること

昭和三十六年から五年間にわたって、NHKでは五人の誕生した子どものことを録音した。そのうちの一人の女児が、雛段に飾ってあるボンボリを指さして、「きれいなね！」と何回も繰り返して感動的に発しているのが印象的であった。

幼児期は感性中心の生活をしているという、幼児が見たものやふれたものに対して驚きを発することは、とりもなおさず感動を現わしているのである。しかも、直接体験の感動から、外なるものを内在化し、内なるものを外在化してイメージをつくりあげていく、そのイメージが幼児体験として残像されていくのではなからうか。

いちよりの落葉で埋まったブランコの腰板に、腰をかけるのではなく、それを枕にして、いちよりの落葉の中に自分を埋めていて二人の幼児たち。外側からみると充実した活動をしているようには認められないが、何故か、満足した面持は、見ている大人に安定感を与える。保育の場にこのような感性を通しての体験を得ることは、幼児が感動することの土壌となるのではなからうか。

感動は美的体験にのみ制限されることはない。成就感を体験したとき、親切な人の心にふれたとき、自然現象にふれたときなどにおいても体験する。しかも、幼児は感動したものに対して興味や関心をもつ。この幼児期にもった自発的興味が何らかのかたち

で自己の内に継続していくという可能性も考えられる。

● 自発性の尊重

倉橋惣三は、自ら伸びようとしている力を自発性と呼んだり、自己活動と名づけている。そしてその内味を、①外界の事物に対する自発的興味、②自己の力を自ら試みようとする発見性及び工夫性（創造性）、③自発的發表性——としている。

すなわち、自発性は、周囲のものに向って示す興味、何でも自らやってみようとする試行と工夫、心の中に湧きあがる想像、それを絵に、製作に、歌に、演出に、絶えず自分を表現していきこうとする發表性に見ることができると。

この自発性は幼児期になって現われるものではない。生理的要求であるとはいえ、乳児は、泣くことによって空腹を訴え、差し出された乳首に吸いついてくる。このように、自発性は乳児の活動において認めることができるが、幼児では一段と顕著になる。

幼児は、外界の事物に興味をもつと、それを自分のものにしようとして活動がおきる。興味をもつことは主体的活動の源泉となる。また、自分の力を自ら試みようとする発見性や工夫性は、試行錯誤の過程を経たり、困難への挑戦という体験をするなどして達成する場合もある。それは、ひとり知的活動に関連する要素だ

けを育てるにとどまらない。主体性を育てることもなり得る。

●興味を育てること

幼児が示した物や人に対する自発的な興味と保育者のねらいがしっかりと結びついたときの学習の効果は大きい。

子どもが興味を示したものを、いかに育てていくか、その方法を考えることは保育者の重要な援助の一つである。このとき、大切な条件は、子どもがどういふ興味をもっているかということ把握することである。また、新し⁽⁵⁾い興味を引き出すためには、保育者の方から課題を投げかけたり、教材など環境の設定によって幼児の好奇心にそれを関連させることもできる。

幼児の興味に基づいてカリキュラムを立案する試みは、Open education (個別学習を徹底するための具体策の一つで、アメリカの学校教育にとりあげられたシステムである)において最近、試みられているが、わが国の幼稚園では、一般には、立案の段階に至っていない。ただし、遊びを中心に保育の展開を営んでいる幼稚園においては、幼児の興味を育てる手だてが試みられている。

三、「芽ばえ」と幼稚園教育要領

幼稚園教育要領の総則及び内容に、「芽ばえ」ということばを数多く発見する。倉橋惣三は、芽ばえ、その基本は、ただ第一段階としての重要性を意味するのみでなく、そこから出発、発生するところの内質的意味を暗示するものとして、「芽ばえ」ということばを用いている。よって、「芽ばえ」には、幼児の生命力や成長力を尊重しているところの保育理念があらわれていると解される。しかも、その生命力や成長力は、自分が自分の行動の主体となることによって実現することができる。

では、幼稚園教育要領では、どのような意味内容を「芽ばえ」ということばによって表わそうとしているのであろうか。極めて分析的ではあるが、「芽ばえ」ということばによって代表されている「ねらい」は、次のようである。

- (一)情操(美的情操を含む)
- (二)道徳性
- (三)社会生活に必要な態度
- (四)自主および自律の精神
- (五)協同の精神
- (六)知識の理解
- (七)社会的対象についての理解
- (八)自然に対する感動

(ウ)工夫する態度や構成する力

これら九つのねらいは、幼児期以後の達成目標でもある。したがって、これらの各々の項目の芽ばえとは何かについての検討が残される。

そこでまず前提として考えておかなければならないことは、幼児が自分の行動の主体となっていて、それが育っていることである。そのためには、先にあげた三つの基本条件が備えられていることである。なぜならば、おそらく、幼児の自発的興味の発展は、この九つのねらいをその主な範疇にするであろうと推定するからである。

四、むすび

「感動すること」、「自発性の尊重」、「興味を育てること」は、本来ならば、入園以前の家庭生活において育てられているところの要素である。しかし、外からの影響を受けやすい乳幼児期の子どもたちは、親や家庭の影響を強く受けて入園してくる。その影響は必ずしも望ましいものばかりではない。私たちは、まず、一人一人の子どもの実態を把握し、その子どもの望ましい面、望ましくない面、育っている面、育っていない面を知ることが保育の

始まりとしなければならない。その上で、はじめて、それぞれの子どもの援助の方向がきまる。

多くの保育者は口を揃えて言う、幼児は保育者の影響をあまりにも強く受け入れるので、恐ろしくなるほどであると。このことは幼稚園においても、外側からの影響を受けやすいという幼児期の特性を如実に物語っている。形式的な保育は幼児に反映されて、形式的な幼児をつくる恐れがある。今日、多くの幼稚園の保育の目標に、自主性あるいは主体性を育てるといことが書かれているが、本当の意味で自主性や主体性を考えているかどうか。改めて、自主性とは何ぞや、自主性を何故に保育目標とするのか、自主性を育てるための保育の方法など、基本的な問題についてさらに考えていかなければならない。

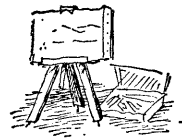
(大妻女子大学)

(引用及び参考文献)

- (1)岡田・安戸・水野編『保育に生きた人々』風媒社。
- (2)宮崎修二郎『柳田国男 その原郷』朝日新聞社。
- (3)倉橋惣三『大正・昭和保育文献集』第八巻、日本らいぶらり。一九七八。
- (4)津守真『幼児から児童へ、児童心理学』依田新・東洋共編、新旺社、六三〇七八、一九七二。
- (5)本吉圓子『愛ときびしさの幼児教育』あすなる書房、一九七八。

私の保育

——自らをみがくこと——



良知 三恵子

いわゆる自由保育形態という保育に取り組んでから一年。

“悪戦苦闘”という言葉にふさわしい毎日でした。苦しくなって投げ出したいと思った日も何度かありました。しかし、いきいきとした子どもたちの笑顔に勇気づけられ、現職研究会の先生方に助けられ、やっとここまでたどりついた、というのが本音です。私の保育——悪戦苦闘の保育ということになるのでしょうか……。自分の中ではいっぱい、尽くしてきただけでも、その足りなさを思うと顔が赤くなります。

私が初めて現職研究会に参加させていただいた年に、堀合文字先生から、「保育はすべて保育者の常識にかかっている」という言葉を、何度となく耳にしました。その頃から子ども

と生活を共にする自分というものが、とても気になりました。毎日の保育の中で、自分の感じ方・考え方が子どもに大きく影響することを知ったとき、自分自身の役割の重大さをつくづく感じます。私の中の“常識”というノートには、空白の部分がたくさんあります。今までつちかわれてきた私の常識とは何だったのでしょうか。それは、うわべだけのものであったような気がします。自分の常識の不充足さに気がつきます。倉橋惣三先生の『育ての心』の中に、「先ず内へ向かった教育なくして、外へ向かった教育はあり得ないことである」とありますが、本当にそうだと思います。保育者として子どもたちを見つめる目を養っていくと同時に、

一人の人間としての自分をみがいて、空白の部分に少しずつ加えていけたら、と思っています。

私は去年、ある出来事に出会いました。それは、とても悲しい経験ではありませんでしたが、私にいくつかのことを気づかせてくれました。そして、私の常識のページを綴ってくれたのです。

◎うさぎの死

四月のある晴れた日、私は歌でよく知られている横浜の伊勢佐木町へ買い物に出かけました。買い物ですませて通りをブラブラ歩いていくと、にぎやかな子ども声に囲まれている露店が目にとまりました。何だろう？と思って近くに行ってみると、そこには掌^{てのひら}ほどの、それはかわいらしいうさぎたちが、慣れない足どりでビョコビョコ動いているではありませんか！

私はしばらくのあいだ、その愛らしいうさぎたちの姿にみとれていました。見ているうちに、その中の一びぎの黒いう

さぎに目がとまりました。つやのある黒い毛がふさふさとしていて、鼻のあたりと首の横のところがちよっぴり白くなっていて、あまり動かないうさぎでしたが、その黒い瞳はきらきらと輝いていました。私は、もうその黒いうさぎをあとにして帰ることができなくなってしまいました。そして、その黒いうさぎともう一びぎ、友だちの白いうさぎを買いました。二匹が仲良く寄りそう姿は、ガス・ウィリアムズの『白いうさぎと黒いうさぎ』そのもので、まるで絵本の中からぬけ出してきたかのようでした。

小さな箱に入れられたうさぎをかかえて家に帰ると、父と母が「ああ、またか！」というような顔つきで、けれどもニコニコして、私と二匹のうさぎを迎えてくれました。（我が家に事件をまきおすのは、いつも私でしたから……）

母は、倉庫からうさぎの家にあふわしいダンボールを持ってきてくれました。父は、仕事の帰りにうさぎの大好物のトンボポをどっさり摘んできては、うさぎが食べる様子を目を細めて見えています。又、母は買い物たびに、葉のついたにんじんがあったからと言って、何本ものにんじんを買った。では小さなうさぎにやわらかい葉をあげました。まだ子どもなので、かたいものはあまり食べません。そんな日の夕食に

は必ず、にんじんが何らかの形で食卓に登場しました。それでも食べきれないで、近所の家にくはったりもしたのです。

この二匹のうさぎのおかげで、生活の忙しさにおわれて話す機会が少なくなりがちだった我が家に、対話をとりもどすことができました。

やがて、黒いうさぎには「ハリー」、白いうさぎには「ミミ」という名まえがつけられました。ハリーとミミはとてもいたずらになって、夜中に箱からとび出して大騒ぎをしたりしました。そして、リンゴでもにんじんでもキューウリでも、ガリガリかじってたいらげてしまうようになりました。

又、名まえを呼ぶと耳をぴんと立てて、声のする方に歩いてくるようになりました。生き物を飼うという経験があまりなかった私にとって、ハリーとミミとの生活は、とても新鮮でした。園の子どもたちにも、毎日のように話して聞かせました。子どもたちはとても興味深げにうさぎの様子に耳をかたむけ、何度か話をするうちに、クラスで世話をしてみようということになりました。

五月八日、もも組に二匹のうさぎが仲間入りです。子どもたちは大喜びで、大事に世話をはじめました。例えば、毎日うさぎの好きな食べものを持ってきてくれたり、寝る時に寒

いといけないと言ってスポンジをもってきてくれたりして、二匹のうさぎをクラスの一員として大切にしてくれました。

五月十三日、この日は、園の行事の母親対象の講演会の日でした。講演会のあいだ、園児は近くにある公園へ散歩に出かけます。私の園では、園庭がコンクリートと人工芝ですので、できるだけ機会をとらえて園外に子どもたちをつれ出すように心がけています。この日も、子どもたちは自然に囲まれた公園で思う存分とびまわり、みんなどろんこになるほどでした。園に戻って帰りの支度をすませると、すぐに降園の時間になりました。子どもたちを母親のもとに返して、ホッとひと息ついた時、隣のクラスの先生が私の部屋にあわててかけこんできたのです。

「先生、知ってる？ うさぎが大変なの！ 白いうさぎが……、それを聞いてすぐにうさぎのところへかけつけるとどうでしょう！ ミミが四本の足を力なく投げ出して、ダンボールの中で横たわっているではありませんか。その鼻からは血がにじみ、口からはあわをふいています。呼吸は不規則で、今にも死にそうでした。何でも講演会に一緒にきていた

未入園の子どもが、白いうさぎを高いところから投げたらしいというのです。

私は奮くなって、すぐに犬猫病院にかけつけました。病院のソファアにすわり、祈るような気持ちで、ミミがはいっているダンボールをひざにしっかりとかがえていました。今にも泣きだしそうになる自分をおさえるのが精一杯でした。他の順番を待つ、犬や猫の飼い主の方々のあたたかい好意で、ミミは一番先に診察してもらうことができました。診察の結果、ろっ骨が何本かおれていて、どうやらそれが内臓にささっているらしいのです。鼻からの出血はそれが原因だということでした。先生はミミの体に注射をしたあと、ゆっくりとやさしく私に言いました。「今夜一晩が山でしょう。大切に上げてください。」

私ははいねいに診察してくださった先生と順番をゆずってくださった飼い主の方たちにお礼を言いました。その時、私の目に見えるものすべてがにじんでいました。でも私は、涙をこぼしたくありませんでした。ミミが死ぬということを確認したくなかったから……。

幼稚園に帰ると、講演会の講師の先生を囲んでの昼食会が催されていました。私はひっそりとした職員室にはいり、ミ

ミをやわらかいタオルの上にとっとなねかせて、しばらくのあいだボーッとしていました。そしてその会合に参加するため、冷静になろうと自分に言いきかせ、昼食会の仲間入りをしました。遅刻したことを詫びると、園の先生が「うさぎ、どうだったの？」と聞いて、ミミのことを心配してくださったので、犬猫病院の先生に言われたことを話しはじめた時、今までおさえていた涙があとからあとからあふれてきて、私はその場で泣きだしてしまつたのです。

泣きながら、講師の先生にとても失礼になると思い、こみあげてくる気持ちを必死におさえようとしましたが、どうしてもだめでした。とうとう私は顔をあげることができなくなつてしまいました。そんな私に講師の先生が、かつてご自分が飼っていらした猫のお話をしてくださったのです。「動物でも、一緒に生活していると、家族の一員になってしまうのですね」と、猫の思い出とともにやさしく語ってくださいました。私はその時、大きくてあたたかい毛布につつまれたような気がしました。そして、私の中にこみあげてくる悲しみを、少しずつやわらげることができました。その時の先生のやさしいお心使いに心から感謝しています。

その日、私は白いうさぎミミを、そつと家に連れ帰りまし

た。リンゴやにんじんをすって食べさせると、少し元気になり、三歩、四歩、あるけるようになりました。ミミは精一杯生きようとしているように受けとめられました。その後、母と私とで手を尽くしましたが、六日後にとうとう息をひきとってしまいました。しかしミミは、その小さな体で、命ある限りを懸命に生きぬいてくれたのです。

私は、うさぎとの生活を通じて、動物への愛というものを私の中に感じることができました。これほど、私の中に強く大きく存在した動物はありませんでした。今までにも私は、バッタやカマキリ、ヒヨコなど、いくつもの死に出会いました。そして、動物の死の処置はどうしたらいいのかなど、保育者の常識としての対処はしてきたつもりでした。例えばお墓を作ったり、お祈りをしたり……。けれども、私の中に本当にそれらの動物たちへの愛情があったのでしょうか？ 又、愛情をもとうと、いっばいに努力したでしょうか。今思い返してみると、その時の自分は、子どもたちと同じような行動をとってはいたけれども、子どもたちの心からはるか遠いところに位置していたに違いないのです。私が私自身

に伝えられないものを、どうして子どもたちに伝えることができるのでしょうか！

白いうさぎミミは、私に大切な体験をさせてくれました。そして、いろいろなことに気づかせてくれたのです。あなたかい人々に囲まれている私のことを、私の動物への愛が今までいかにうすっぺらいものであったかを……。又、生きている、ということの意味を考えさせてくれました。

◎私の保育

今、これが私の保育です、と言えるものは何ひとつありません。ただ、しいて言うならば、先生と子どもである前に先ず、人間と人間でありたい、喜びも悲しみも子どもと同じところで分かちあえるような人間でありたい——そうなれるように努力するのが私の保育ではないかと思えます。そして、子どもたちにも願うのは、思いやりのある人になってほしいということですが。そのためには、思いやりのある自分の生活を心がけていきたいと思います。

(横浜学園附属元町幼稚園)

「生きる」という事

小林暉親

タッタッタッタと、早い子供達が飛び込んで来た。「お早う」もそこそこに、もう四方八方、それぞれ好きな遊具に取りついて、遊び出している。その後からのんびりと、お母さん方が、ベチャクチャとおしゃべりしながらやって来た。今日も又、にぎやかな一日になりそうである。

と、そのうち、駐車場の方から、聞き慣れない奇声が、聞こえてきた。そちらの方を見ると、今日、見学予定のK君と、お母さんと、妹の三人が、何かもみあっている。お母さんは、しきりにK君の手を引っ張って、門の方へ来ようとするが、K君は頑として来ようとせず、奇声をあげている。妹の方は、おびえて母親にしがみついている。そこで私が、自

己紹介方々、「お早うございます」と、寄って行くと、自動車から、お父さんが降りていらした。私が「K君、お早う、どうしたの？」と聞くと、お母さんが、K君は、何時も初めての場所は、入りたがらない事、特に今日は、お父さんが車に残っていたので、もっと車に乗っていたらしい事、などと話して下さった。(お父さんは、K君達を送って来ただけで、すぐ会社に行く予定だったとの事)しかし、K君の様子に仕方なくお父さんも、K君を抱っこして園の中に入り、しばらく、K君の様子や、親子教室について、一緒に話す事にした。

御両親の話によると、K君は、二歳になっても言葉が出なく、呼んでも振り向かないので心配になり、市の言語治療室へ相談に行きかけたが、近所のお医者さんから、東京の病院を紹介してあげるから、と言われ、言語治療室へ通うのはやめ、紹介されたB病院へ、毎月二回、通う事にした。(K君、二歳三か月)その病院は、医師の他に、セラピストがいて、母子関係理論をもとに、子供の相手や、親への指導をしてくれた、との事。しかし、一年半近く通ったが、最近、とてもそのやり方に疑問を感じ、又、お母さんが、心身共に疲れき

つてしまつたので、思いあまつて、もう一度、市の言語治療室へ相談に行つたところ、こちら（親子教室）を紹介されて来た、との事であつた。

B病院での指導とは、K君の言葉の出ない原因は、母子関係が育つていない事からきているもので、まず、母子関係をしっかりと育てる事から、始めなければいけない。その為には、生活全体を、K君中心にして欲しい。そこでまず、K君専用の部屋を一部屋用意し、その部屋には、タンスの他は、何も置いてはいけない。そして、その部屋の中に、一日中親子で居る事。特にお母さんは、常に一定の場所に坐つていなければいけない。そして、同じ所を見つめていて、子供が呼びかけようと、指さしをしようと、反応してはいけない。視線を合わせたり、語りかけてもいけない。たとえ、噛み付いてきても、表情を変えてはいけない。又、躡りよとしてもしけない。排泄はオムツをさせ、オムツの中に大小便をしても、すぐ変えてはいけない。食事は親が食べさせる事、お母さんが、トイレに行く時や、やむをえず、台所仕事等する時は、必ず、おぶつてしなければいけない。部屋の窓を開けてもいけない（風が入つて刺激になり、親子関係をつくる邪魔になる、という主旨）。外出は出来るだけ避ける。子供を叱

るのは、もつての他である、等々の内容であつた。

このような指導に対し、当初は御両親も、それで我子が話せるようになるならと、両親協力しながら頑張つてきたが、半年、一年過ぎてても同じような指導であり、子供もあまり変らず、特に最近、常におんぶで、母親が、心身共に、非常に疲れてきた事、三歳半になつても、まだ一向に大小便は教えず、段々と子供は外に出たがるようになり、このまま、他の子と遊ばせないでよいのだろうか、幼稚園や学校に入れるようになるのだろうか、又、下の妹も二歳になるが、こんな生活で、悪い影響を与えないだろうか、等々の心配がつつてきたとの事であつた。そこで両親で話し合つた結果が、今日の親子教室の見学になつたのである。

私は、この話を聞きながら、思わず、寒けを覚えた程である。何故なら、人の一生でも、本当に一番大事な二―三歳の時期に、親からろくに言葉かけもされず、呼びかけても答えてもらえず、目もあわせてもらえず、一日中狭い部屋に閉じ込められ、友達も得られず、ただ、存在していただだけのK君、そして、K君以上に、正常な妹さんの発達まで、阻害され、もし、この一年半の空白が、子供達の一生に大きな傷を与え

たとしたら……。生きている人間、特に発達している子供達をみつめる能力のない人間（セラピスト）が、どんなに一つの理論が正しく、障害のある子供に役立つものであったとしても、生半可な知識と経験のもとに、子供達の障害の治療どころか、逆に発達をゆがめてしまうとしたら、こんな恐ろしい事はない。子供は生きてるのであり、子供に理論を適用しても、理論に子供をおしこんでは、決してならないと思う。

しかし、そんな私の中のつぶやきを、両親に告げるわけにもいかず、とりあえず、当親子教室は、発達に何らかの問題のあるお子さんと、お母さんが、お弁当を持って週二日遊びにくる所で、子供は、自由に、思いきってたくさん好きな遊びをし、その間、お母さんは、他のお母さんとおしゃべりしたり、子供の障害について学んだり、子供と遊んだり、楽しく過しながら、時々、職員とお子さんの事について話し合いをし、日常生活での接し方や、将来について相談する所です、と説明する。そして、こんな所でよかったら、何時でもいらっしやい、と話をし、後日、入園に関して、返事を頂く事とした。

御両親はあまりに、B病院でのやり方と違う為、しばらく迷われたようだが、数日後に申し込まれ、翌日から元気に通

う事になった。（三歳八か月）

最初の日には、あんなに愚図ったK君が、今日は嘘みたい
に、大人しく入って来た。登園して、まず最初に私がお母さん
にお願いした事は、ここではどんなに床や、ジューターンを
汚してもよいから、オムツをはずして、おしりを軽くしてあ
げる事、子供が、指さしやお母さんに寄って来たら即座に応
じてあげる事、たくさん子供と遊ぶ事であった。K君の最初
の頃の様子は、まず、子供らしい可愛いらしい表情がなく、
おもしろにしても、全く表情（不快の）の変化もなく、気に
いらないと、お弁当をひっくりかえしたり、他の人が妹に働
きかけると、まるで自分の玩具をとられるかのように、妹を
つかんで、噛んだり髪の毛を引っ張ったりして離そうとしな
かったり、母親に甘える様子もなく、又、何かでじゅっくり遊
ぶ事もなく、ただ、やたらに怒って、奇声をあげるといっ
た、状態だった。無論、その目つきは険しく、親子で楽しく
遊ぶ、などという雰囲気ではなかった。その為、お母さんの
緊張がかなり高くなってきた。そこで、再度、お母さんと次
のような話し合いをした。

まず、K君は、初めての集団生活で、あまりに今までの生

活環境と違うので、びっくりしている事、そして、それ自体（イライラ・奇声）はそのうちおさまる事、むしろ大事なのは、お母さんと楽しく遊べていない事が問題である（K君は、お母さんより、他の母親に寄っていく事が多い）。母子関係とは、ただ親子が傍に居ればよいのではなく、子供が、親を必要と思った時にすぐ応えてくれる事により、親に対して、親しみと安心感を持ち、段々と、親を好きになり、同時に親も、子供の仕種が可愛くなるという、相互の好ましいという感情交流が豊かになり、段々と愛情が育っていく事が、母子関係がつく、という意味である事。

又、K君の様子を見ると、遊びに持続がなく、おどおどして、どう遊んでいいか、遊び方がわからない、遊びたいという内側からの気持が、弱いように見受けられる。が、これは発達にとって、とても大変なマイナスである。というのは、子供にとって、遊ぶ、という事は、大人が仕事の合間に、遊ぶ、のとは違って、生きていくという、生活そのものである事、どんなに親が、着物を着せ、おしりの始末をし、食事を食べさせたとしても、その子供が、自発的に、生き生きと遊ばない限り、生きていく、とは言えない事、従って、どう、親子関係を育てながら、K君なりの遊びを育て

あげるかが、今一番大事な事である事を説明する。

その為に、まず、今、御両親がなすべき事は、徹底して子供二人と遊んであげる事、特に体を触れあつての遊びが大事である。例えば、グルグル回すとか、一緒にトランポリンやエアートランポをするとか、親子体操をするとか、くすぐりっこをするとか、毛布を使つてのゆさぶりや、すもうをとるとか等々。何よりも親が楽しく遊んでみせ、その中にK君を無理なく（僕もやってみたい、という気を起こさせる）引き入れ、徹底して、親子で遊んで欲しい事を、お願いする。

すると、早速翌日からお母さんは、これまでの素敵なスカート1枚の服装から、一転して、体操姿で登園するようになり、どろんこ遊びでも、かけっこでも、体操でも、何でも子供と一緒に、汗を流して遊ぶようになって下さったのである。同時に家でもお父さんが、仕事から疲れて帰ってきてても、すぐ、すもうや、毛布遊びや、グルグル回しや、ふざけっこなどをして、どんどん働きかけて下さったのである。

そして、このような御両親の努力の成果が、今まで、おもしろしをしても、全く反応のなかったK君が、不快な表情を呈するようになり、段々とお母さんが好きになって、離れなくなり、登園してくると、ニコニコして入ってくるようになり、

少しずつ、少しずつ色々な物事に興味を示すようになり、又、まだ意味ははっきりしないが、言葉も増えてきたのである。こうして、子供が段々とよくなってくると、親も嬉しくなり、益々、我子が可愛くなってきたようである。

そんな或る日、御両親の方から、面接の申し込みがあった。それは、来年、保育園（障害児保育として）に入れるでしょうか、という事であり、もし入れなければ、B病院での一年半が悔やまれる、という事であった。そこで私は、「B病院での指導の全てが、間違っていた訳ではなく、その一部のプラスの面が、今のK君の成長を助けている所もあり、それに、大事なものは、過去を悔む事ではなく、今、K君に何が必要で、家族として何ができ、そして、これから何をしておくかを、一緒に考えていく事が大事ではないでしょうか。そこでこれからの方向として、もう大分、K君がお母さんを好きになってきたので、少しずつ、将来、普通児集団の中に入れるよう、色々なルールを教えていく事、これまでのように、大人がリードする遊び方ではなく、一人で、どんな好きな遊びをさせて、K君の内面の生活を充実させてあげる事。そして、それらの結果として、来年の保育園を考えましょう。又、それまでのK君への接し方の注意として、これま

での大人の側からのK君への働きかけを、少しずつ、K君からの反応・合図を受けて、応じていく程度にしていく。そして、出来るだけ、K君の自発を大切に、K君の内面が見える親になって欲しい事などを話し合う。

タッタタッタと、最初の子供が飛び込んで来た。K君である。先生達が「K君、お早う」と言うと、ピヨコン、と頭を下げ、ニコニコとして、先生達の顔を見る。今日も、御機嫌なようだ。この頃は、すっかりしゃべる言葉も多くなり、何よりも怒る事がなくなった。そして、何にでも実によく遊んでいる。そんな時のK君の目は、生き生きと輝いている。本当に、自分の力で「生きている」という感じである。毎日毎日が楽しそうなK君。何よりも、目がとってもかわいらしくなったK君。一回り大きくなったK君。

後から、他のお母さん達と、ベチャクチャしゃべりながらやって来たK君のお母さんに、「この頃、お母さんの方が御機嫌ネー」と例の如く、私がからかうと、「エヘヘ」と、まんざらでもなさそう。何故なら、この四月から、保育園に入れる事が内定したからである。（八千代市立・親子教室）

人間と動物はどこが違うか

稲垣久和

最近、子供の自殺が増えています。子供の教育は、大人のものの考え方如何で決まります。従って子供が生きる力をなくしてしまうのは、大人自身が正しく生きる意味をつかんでいないことの反映です。

私は生物物理を研究しています。その方面から、まず生物と無生物（≡物質）との本質的な違いを考えてみましょう。生命体を科学的にどう定義するのかという問題です。その一つの方法は熱力学第二法則（エントロピー増大の法則）を拡張することです。もとの法則は

$$dS = dS_1 - dS_2 < 0 \quad (A)$$

と書けます。 dS を“全ネグントロピー”、 dS_1 を“ネグントロ

ピー消費”と呼びます。ネグントロピーを「より高い秩序」という概念で置き換えても結構です。 dS_2 が負ということを書葉で表わすと、物質の世界では、放っておくと、どんな「秩序」の低い状態へ落ちてゆくということです。例えば新品の三輪車を外に一年以上放っておくと、さびてポロボロの鉄くずになってしまうわけですね。これは熱力学第二法則のあらわれです。次に自然界の生物をも含めるために (A) を次のように拡張します。

$$dS = dS_1 + dS_2 \quad (B)$$

ここで dS_2 を “ネグントロピー輸送” と呼びます。 dS_2 は周囲（環境）からネグントロピー、即ち「より高い秩序」をどんどんとり入れる項です。例えば外に植物の種を播いて、一年以上放っておくと成長して見事な花が咲きます。これは dS_2 という項を通して日光や水や酸素等をどんどん取り入れるからです。つまり dS_2 があることによって、生物が無生物と区別されるのです。そしてこれが、熱力学的に “生きている” という定義になります。

さて以上のことを頭に入れながら、次に (A) (B) を使って動物と人間は本質的にどこが違うかを考えてみましょう。今度は dS_2 を “自然的なもの” と呼びます。これは、生

れた時から自然に身につくものという事です。動物学者が個や集団の行動を研究し、それをそのまま人間に応用するのは「自然的なもの」のわく内で考えているからです。人間が他の動物と異なることの一つは、「人間に生きる意味と価値を与えるものは何か」という形而上学的な問いを自ら問えることです。従って心理学者も、個人と他人又はそれらのつづっている社会というわく内で、その関係のみを研究する限り、たとい人間の深層心理という言葉を使ってもやはり「自然的」です。何故なら先の大きな問いに、はっきりした答えを与えなくては、本質的に人間と動物を区別できないからです。そこで私達は「自然的」なものだけでは不十分で、*psyche*に対応するものを必要とします。この *psyche* を「超自然的なもの」又は「人格的なもの」と呼ぶことにします。これこそが、人間と他の動物を区別し、人間にユニークな価値即ち人間らしい人間性を付与するのです。人間は超自然的なものを受け入れる場所を持ち、それを理解できます。では一体、「超自然的なもの」とは何でしょうか。それは人間より高い秩序からとり入れるべきはずのものです。

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち神のかたちに創造し、男と女とに創造された」(創世紀一・二七) 聖書

は人格的な神が存在し、万物の創造主であると教えています。万物とはすべて即ち、無生物・生物・人間を含み、これらは神の被造物であるが故に、意味を持ちます。そして人間は、その創造主のかたちに造られていると、記されていますから、一人一人の人間が動物と違って全くユニークな意味と価値を与えられた被造物なのです。愛と尊敬をもった人間の人間らしさ、創造性をも含んだ人格的なものの基礎はここにあります。私が超自然的なものと呼んでいますのは、人格的な創造主との正しい関係のことです。これが先の形而上学的な問い「人間に生きる意味と価値を与えるものは何か」への答えです。

現代は、人格的なものがはっきり自覚されずに、従って人間が本来の人間性を持ったものとして扱われることが余りにも少ない時代と言えないでしょうか。人格的なものの基礎を子供達に伝えてゆき、又引き出すことが教育の目的ではないでしょうか。

「きょうは生えていてあすは畑に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなた方に、それ以上よくしてくださいさらにはずがあるか」(マタイ六・二六)

(国際基督教大学物理学教室)

クリちゃん動物園散歩(四)

根本進



イタリア人には、いたずら好きが多い事は、他の場所でもみました。

やはりローマのボルゲゼ公園の動物園で、違う日に行った時の事でしたが、二人の若者が低い外柵を乗り越えてチーターの檻に近づいていました。見ると昼寝をしているチーターの片足が檻の縁まで伸びていて、二人はその足の裏を指先でつついているのです。もし猛獣が怒って急に向きをかえたら……とこちらはハラハラしました。

というのは、私にはこんな経験があります。名古屋の東山動物園で猫科の動物舎を見ていたら、親切な飼育係が展示の

裏側の動物の寝室を見せてくれる事になったのですが、その通路が暗くて狭い上に、「この連中は待ち構え方の動物で案内に手が早いですから気をつけて下さいよ……」と言ったか言い終らぬ中にくぐ前の檻の下からサッとスゴイ爪を出した前肢が私の靴の近くに躍り出てきました。これには本当にびっくり、一瞬、お尻の穴が縮むほど胆を冷しました。以来私は、猫族がコワイのです。

よく見るとこの二人は、そんな事も心得た常習犯なのかも知れません。いざという時に逃げ出すか、とびすさる用意の足構えとでもいう逃げ腰で、そんな危いことを楽しんでい

様子です。

それを見ている他の客も、それに注意をするでもなく、形勢如何とニヤニヤしながら、困睡かたずをのんでみているのでした。……こう書く私も、先を急ぐ旅行者とは言え、ふりかえりふりかえりこれを見ていたわけですから、立派な事は言えませんが。

この動物園には記念写真をすすめる写真屋がいて、看板商品とでも言うか、動物園から借りたのか、ライオンの赤ん坊を椅子にのせていて、お客がこれを抱いたところを一緒にスナップしようと誘っていました。サーカスのテント前ならいざ知らず、こんな風景も、他の国の動物園内では見た事のない情景でした。

ミラノにも公園の中に動物園があります。その動物園の入口は小さく可愛らしくて、お伽の国の遊園地のような感じでした。園内には、老樹が木蔭を作っている処に泉の湧く池があったり、市民が昼休みに憩いの場として利用するのにとてもびったり、いい感じですよ。

このすぐ横に象舎があって、人が集まるとインド象が二頭、芸を披露していました。

まず飼育係が象の大きな顔につり合う、大きな眼鏡をかけ

させます。かけてみると、象の眼の方は不つり合いに小さいのでおかしく、お客は大笑いです。その後で鼻でラッパを吹いたり、太鼓をたたいたり……まるで見せ物小屋のようなサービス振りで喝采を浴びていました。

もっと私を驚かしたのはカバの所で、飼育係がカバの口元を軽くだたくと、カバは大きな口をアングリと開けます。その時、飼育係は喜ぶお客達に手をさし出して、チップをもらっていました。

私がナボリの国立美術館で他の客よりいささか熱心に彫刻を見て廻っていたら、それと知った監視員が近づいてきて眼で合図をして誘うのです。つまり今はここに展示されていないが、もっといい彫刻が別室にあるのを見ないかという事で、以前に一度はその誘いに乗りましたが、今日は二度目なので断りました。すると私が一息入れにベランダへ出た時に、内側からカギをかけて、「お前は俺にチップを呉れないと、出さないぞ」という仕草でニヤニヤ顔で私をおどかすのです。もし私が本気で怒り出せば、とりすました顔でドアを開きますが、ともかく、そんな茶目っ気のあるズルさといわずら好きな国民性だと思いました。

お客へのサービスという話が出たついでに、動物園側としてどんな事をしているかについて気がついた事を書いてみましょう。

案内一般にまだ知らない方も多いと思うので、まず日本は、東京の上野・多摩の場合を例にして述べると、この二つはどちらも東京都の動物園ですが、園内の売店などは東京動物園協会が経営しています。協会は動物園関係事業を後援して、写真その他の資料を集めたり、毎月印刷物を発行したり、動物愛好会、昆虫愛好会の催しをやっています。

はじめは何も知らない通りがかりの客として、この愛好会をのぞいた私でしたが、面白く、教わる事がとても多くて、努めてこの会へ出る様になりました。ここでは園長や、飼育課長をはじめ飼育係員の皆さんが、私たちが今まで知らなかった動物の話や、飼育の苦労話を聞かせてくれるのです。園外から鳥や、動物や、昆虫の専門の学者さんが、講演に来ることもたびたびでした。

夏には夜の動物園見学会というのがあって、動物はどんな寝姿をしているか見ることが出来ました。ライオンは大の字

になり寝そべっているし、キリンや象はなかなか横にならないのです。飼育係員の話では、草食動物は大体敏感でいくらそーっと近づこうとしても、こちらが近づく前に向うの方が先に気づいてしまつて、のんびりした寝姿というものはなかなか見られないという事でした。

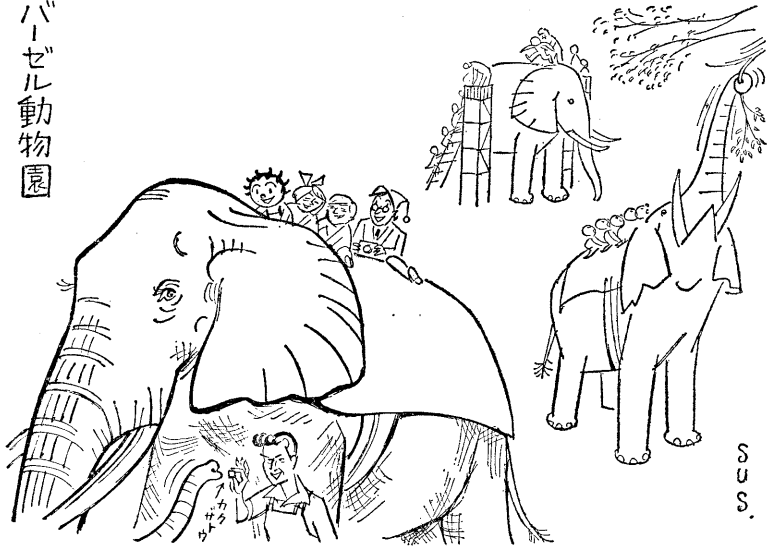
「あれ以来、夜中に便所に起きたりすると、今頃動物園の象はやっぱり立っただまま寝てるのかなと思つたりする様になりました」という人がいましたが、私も同じで、時々、真夜中の動物園をふと考えることがあります。

外国の動物園では、ゾー・フレンズ・デー (Zoo Friends Day) というのがあって、この日はいろいろな動物のショーをやつたり、ペット動物の飼育相談をやつたりしてお客にサービスをする聞きます。日本でも最近それを真似た催しをする所が増えているようです。

動物の絵や、赤ちゃんの名前の募集や、大きく育つた動物の計量を当てさせ、この日に当選者を発表したり、動物園も土地柄によつていろいろ新しい企画をしているようです。

これはそんな特別な催しではなかったのですが、スイスのバーゼル動物園では十年前までアフリカ象にお客を乗せていました。私はここへ数度行った事がありますが、その象たち

バーゼル動物園



S U S .

が面白くて長時間みている中に、象の飼育係員と仲よしになりました。明日お前も乗せてやるから、みんなと一緒に並べようというので、翌日も一度行きました。日曜日で大変な人出で、象に乗りたいたいの行列は百メートル位続いていました。が、並んでいるのは子どもばかり。恥しいけれど我慢して三十分並んで順番を待ちました。

乗る所は、スベリ台の様な梯子を十段位登ると象の背と同じ高さの台になっていて、そこで青年が世話して乗せてくれます。三人の子どもたちといっしょに象の背にまたがって、大きく左右に揺れながら、ゆらゆらといい気持。鳥類が放し飼いになっている広い芝生のまわりを一周した頃には、股がさけそうで痛くて……、でもこんなことは多分一生に一度の事だから我慢しようと思ったものです。

後でタイの象を飼っている農村へ行って、本格的に象に乗せてもらった時にわかった事です。象は首に乗ると両足も開かずすみまみすし、揺れずに楽です。そして象の操縦は、両足先を象の両耳の後にあてて、ここだけは柔い象の皮膚をゴシゴシとこすって右、左に歩かせるのです。

(漫画家)

笹原

私が五歳の頃、母は満州からの引揚げによる過労のために心臓を患い、長期間の自宅療養をすることとなった。三人兄妹の真中であつた私は、いたずらで一番世話の焼ける子供だつたせいか、信州に住む母方の祖父母に預けられた。

中央線の茅野からバスで四十分ほど播られると終点の堀という小村に着く。そこから、なだらかな勾配の田舎道を、唐松林に何度も入つたり出たりしながらゆるゆると一里ほど登ると笹原という集落に出る。百軒あまりの茅葺屋根の農家が、そこかしこに岩石の露出した道に沿って曲がりくねつた帯のように延びている。新しく湯気の立ちそうな馬糞や、古くてわらのようになった牛糞の転がる坂道を登ると、村の中央の辺りに木造の火見櫓があり、その二軒ほど上に祖父の家があつた。村の旧家である祖母の家に

藤原正彦

婿として迎えられた祖父は、その頃、小学校の校長を引退して百姓をしていたが、同時に部落の長老として村を取りしきつていた。四季の美しい八ヶ岳の広大な裾野に抱かれたこの地に、私は両親と別れて約一年間を過ごしたことになる。祖父母はこんな私を不憫に思ってくれたそうだが、当の本人は淋しくも何ともなく、また自分が三人の子供の中からやつかい者として選ばれたことなど知る由もなく、自分だけが田舎で遊べると大喜びでいた。

信州での生活が始まってしばらくの間は、村の子供達に「東京人」と呼ばれ差別されたりしたが、そこはやはり子供同士で、間もなく田畑や山河と一緒に飛び回るようになった。その頃東京の子供達の間で流行つていた「水雷艦長」なる遊びを教えてやつたら、またたくうちに村の小中学生の間で大流行したりした。私は

ほぼ完全に信州弁を話せるようになり、そして、持前の無鉄砲さと喧嘩強さにより、いつの間にかギキ大将にまでなっていた。

菓子のない時代であったから、おやつはもっぱら草木の実だった。柿、柿渋(信濃小柿)、アケビ、野イチゴ、スモモ、カラモモ(杏)、栗、くるみ、梨、地梨(ボケの実)、須栗、ミネズボ(アララギの赤い実)等の数え切れないほどの実が村にはあって、何はどこのものが最も甘い、などということは諳(そん)じていた。野生のものが多かったが他人のを失敬することも時にはあった。畑の野菜を盗むことは敵に戒められていたから手を出すことは決してなかったが、木の実などに関してはそれほどの罪悪感はなかった。そもそも野にある木などは、持主が誰なのか分りにくい。

ある時、自分のヒロスミと吉平を引き連れて遊んでいるうちに腹が減ってきた。丁度、道から少し入った所に大きなカラモモの木があって、熟した実が枝もたわわになっていた。どこの誰の所有かは分らなかつたが早速頂だいすることにした。顔も猿に似ていたがとりわけ身の軽いヒロスミが木によじ登り、野球のうまい私が落下するカラモモを受け、呑気で多少ウスノロの吉平が道で見張りをすることになった。作戦は成功で、その上このカラモモは格別に美味しかったから三人は大感激だった。ところがその日の夕食時に、この話を得意気に語ったところ、祖父にいきなり、

「バカッ、あの木は平作のもんだ」

と怒鳴られた。何のことか分らずに目を白黒させていると、

「平作は吉平のトッサ(父さん)だ」

と今度は大声で笑われた。

こんなギキ大将の私が、一度だけ自分の前で面目を失ったことがある。ある夏の日、数人の部下を従え明治温泉の方面へ探検に行つた時のことである。灌木をかき分け進んでいた我々一行は、幅十メートル程の溪流のほとりに出た。川には大きな岩がごろごろして流ればさして速くなかつたが、鬱蒼とした林に陽光をさえぎられた川面は暗くよんどんでいて、どことなく不気味さを漂わせていた。所々に深みのあることが流れ具合や色の濃淡で簡単に分る。皆が岩から岩へと飛び移つては渡れそうな場所を探し始めたが、間もなく一人が浅瀬をうまく見つけた。彼は半ズボンのすそを思い切りたくし上げてから、注意深くゆっくりと歩み始めた。深い所で水が股の辺りまできた時、

「おーお、冷てーぞやーい」

と頓狂な声を上げた。皆が同じように続いて渡った。ところが最後に残された私だけが何故かひるんでいた。半ズボンをたくし上げてはみたが足が一步も前に出ないのである。私より身体の小

さな者が何人も渡ったというのに、ふくらはぎの深さの所に立つたまま身動き出来ない。流れの向うでは、

「やーい正彦、何やってるだ、早くこっち来いやれ」

「オメードーユード、コウエーダカ(お前どうした、恐いのか)」などと口々にはやしたてる。自分に嘲笑されていると思うと恥ずかしくて堪まらないのだが、いくら焦ってみても足が恐怖にすくんできて言うことを聞かない。数分もしてからやっと、

「そっちへ渡っても何もネーズラで帰るじゃ(帰ろうよ)」

と言うのが精一杯だった。子分達はしぶしぶこの命令に従ってくれたが、私は屈辱感で一杯だった。

最近になってこの事件が突然思い出されたのだが、あの時の恐怖感の正体があっけない程容易に解明した。

私が母や兄妹と共に満州の新京(今の長春)を脱出したのは終戦の数日前だった。それから丸一年間、当時満二歳になったばかりでよく歩けなかった私は、母に抱えられたり引きずられながら満州と北鮮の野山を彷徨した。無論その間のこととは全く記憶に残っていないのだが、母が帰国後に著した引揚げの記録『流れる星は生きている』により当時の状況がうかがえる。その中に、私達が赤土の山を這いずり回ったことなどと共に、濁流の川を渡った

時の描写がある。母は泣き叫ぶ子供を叱咤しては一人ずつ小脇に抱え、泥流に押し流されながら渡河したそうである。

私の川に対する恐怖心はここにあったらしい。二歳で体験した異常な恐怖が、いわゆる記憶としてではないが何らかの形で、五歳になっても身体に残っていたのだろう。こんな事が心理学的に起り得るのかどうか私には分らないが、勇気と冒険心に富んだ腕白少年だったことを考えると、他に説明のしようがないのである。

笹原における一年の田園生活は、今では何もかも楽しい思い出となっている。

先日、亡くなった叔母の法事ついだったが、久し振りに冬の笹原を訪れた。今では、茅野駅から笹原まで定期バスが走り、村の中央を貫くでこぼこ道は滑らかなアスファルトになり、無器用に丸太を組み合せただけの火見槽はより高い鉄塔に置き換えられている。祖父は十年ほど前に亡くなったが、八十五歳の祖母は足腰に衰えはあるものまだ健在である。二人でこたつにあたりながら降りしきる雪を見ていたら、なぜか無性に外を歩きたくなくなった。縁側に腰かけて、もう長いことはいたことのないゴム長に足をこじ入れていたら、見ていた祖母が、

「この寒いに（こんなに寒いのに）」

となかば憐れむように言った。

前の通りをバス停のある下りまで下り、そこを北に曲がった。

茅葺屋根はすっかり姿を消してしまい、新しい色瓦がいらかを競っていた。雪が積っていただけ救われたような気がした。村はずれにあるウブスナサマ（産土様）は少しも変わっていないかった。

松林に囲まれた小さな境内の中央には産土神を祭った社があった。いわば村の氏神様みたいなものだったが、付近の野原を走り回っていた子供達にとっては、高原の強い日射からの唯一の逃げ場でもあった。また私の大学受験の際には、合格祈願に祖母が毎朝お参りした所でもある。雪で白くなったウブスナサマは私の記憶にはないような気がした。かつて村人の誰もがしていたように、社の前で両手を合わせていたら、毛虫も草いきれもないウブスナサマが、妙に奇異なものとして感じられた。笹原にはガラギラした夏の思い出しかない、と思いつつ再び下尾根の方角に下り始めた。下尾根には祖母の田と畑が一面ずつある。ウブスナサマから歩いて来てちょうど下尾根にかかる辺りが、笹原中で最も眺望のきく場所である。私は立ち止まってうちの田を探してみたが、同じような田の中からすぐに見つけることが出来てとてもうれしかった。ふと、遠くの峠道をこちらに向かつて祖父が、いつ

もそうしていたように黒いゴム長をはき、黒いエリ巻きで頭からあごをぐるりと包み、歩いてくるような思いに捉われた。大柄な身体を腰のところで前に屈めてゆっくり歩く様までがはつきり目に浮かんだ。私にはとりわけ厳格な祖父であったが、この時はしわだらけの額の下にめったに見せたことのないやさしい微笑があった。雪の田畑には何の変わりもない、時が勝手に空回りをしたただけだ、と思えてならなかった。

私は、そのまま遠くへ行ってしまうような峠道には入らず、踵を返した。冬の思い出もあったと考えるとなぜかホッとした。村の周囲を大きく回っているうちに、ゴム長の底から冷気が伝わってきたのか、爪先がかじかんで痛かった。この痛さも確かな冬の思い出だと思った。

家のガラス戸を開けると、こたつでうたたねをしていた祖母が、重たそうに上半身を起こしながら、

「寒かったら（寒かったでしょう）」

と言った。私は、

「寒くなかった」

とだけ言って急いでこたつに足をつっこんだ。

（お茶の水女子大学）

子どもと共なる日々

松原和子

袋小路に面している我が家の前に、三輪車、補助つき二輪車が、十台ほど止まっています。道には、チョークで何やら線路のようなものが書かれています。

庭に出した敷物の上で、二歳から六歳までの子どもが、お菓子を真中にワイワイ集まっています。六歳の大きい方の子は、次に何をして遊ぼうか相談しながら、四歳位のは、夢中で、二歳位のは、お菓子を手にウロウロしながら食べています。

これは、我が家の三人の子（長女六歳・次女四歳・長男二歳）と、それぞれの友だちが集まったの、三時頃のおやつ風景です。

すぐそばに、日本海を見下ろせる小高い小さい丘もあり、自動車もそれほどこない遊びやすい環境に住めることに感謝

しつつ、子どもと共なる日々を過ごしております。

しかし、長女が生まれてから、この安定した友だち集団ができるまでに、様々な問題にぶつかりました。そして考えたことや、努力してみたこともありませぬので、家庭にいる母親の立場から、集団づくりという点について、この機会に整理させていただきます。

我が子の成長を、逐一自分の目で、手で、観察してみたいというわがままからと、少なくとも小学校に入る位までは、母親との関係を密に育てたいという考えで、長女出産と同時に、仕事を辞めて家庭に入りました。

しかし、長女二歳半・次女一歳の頃から、子どもにとってのはのびのび遊べる友だち、母親にとっても、共に語り合えるような集団が欲しいと思いました。

近所に殆んど同年齢の子ども、母親がいなかったこともあって、なにか良いグループ活動がないかしらと、捜してみました。（頭には、お茶の水女子大の松村研究室での、女子集団指導のグループ活動がありました）が、結局私の思うようなものではなく、最後に訪ねた新聞社の人に、「それでは投書

の形で主旨を述べて、有志を募ってみては」と、助言されました。

「大自然の中で、子どもをのびのび遊ばせながら、母親も共に育つような集団づくりを、してみませんか」という内容で、投書してみました。社の人の配慮で、電話番号・住所は記しませんでした。社を通じてかなりの反応がありました。

そしてできたのが、母子のびのびグループでした。母親七人ほど、子ども十人ほど（三歳―一歳）で、毎週一回、市の中心に近い海岸沿いの松林に、お弁当を持って集まりました。子どもを遊ばせながらですので、テーマ活動はなかなかはかどりません。それでも、子どもがいるが故に、社会とつながるチャンスを持ってなく、イライラしていた人達が多かっただけに、活発な集まりとなりました。

子どもたちは、最初慣れないので、親のまわりにウロウロ―それでも他の子を非常に意識しながら―していました。車のある人が、遊び道具の運び役になりましたが、回を重ねるにつれ、それらの取り合いが始まりました。そうすると、仲裁役をする子がでてきたり、すぐたくという手段に訴える子がいたり、場面場面で面白い子どもの姿が見られました。

長女も私から離れなくて困る方でしたが、このグループに参加するようになってから、友だちとの行動が、活発になったようです。友だちと、松林の中を探検するまでに成長しました。

目の前に、常にこのような子の活動が展開していますから、そこで生じる問題を取り上げれば、母親の話題には事欠かないのですが、他に次のようなことを、話し合いました。

日常の基本的な生活習慣を身につけさせる方法・思いやりなどの情操面の育て方・近所の母親たちとの、子を通してのつき合い方・自然食品のすすめ・嫁姑の問題（メンバーの中に、この問題で離婚しかかっている人がいました）などです。また外国人の育児を参考してみたいということで、英語に堪能なメンバーの助けを借りて、同年齢の子どものいる外人の家庭を、訪ねたりもしました。

おもちゃの研究と称して、デバート歩きもしました。母親の活動が主になって、子どもが迷惑、という目もありましたが、母親が生き生きしているということは、子どものためにもなるという主義で、運営していきましました。

後には、子の活動係を順番に二人決め、係が子の課題活動（お店屋さんごっこ・お話・ゲーム・運動など）をしている

間、他の母親は、話し合いをするという形式をとりました。

冬期間には、ボーリング場の広い集会室を、営利が目的でないのなら、ということでも、無償で貸していただき、とても幸運なグループ活動でした。

幼稚園のことも、よく話題になりました。全ての面で子どもを尊重しながら、その自発性を重んじ、母親も共に育てるような幼稚園が、我が家の近くに見つけられなかったこともあって、このグループが、小さいながら、幼稚園に変わらうものになってくれると良いと内心願っておりました。

しかし、その点に関して、メンバーの目的意識が、実に様々でした。例えば、グループに子どもを預けて、自分は別のおけいごとがしたいとか、子どもにもっと英才教育的な、知的な訓練をして欲しいとかです。

子どもの自発性を重んじる、ということの共通理解が、とても難しいことでした。

それと、私自身三番目の子が生まれることになったため、この「のびのびグループ」は、長男出産の二か月前まで、一年半続き、閉会しました。最後は皆で一泊旅行に行きました。長女は二歳半から四歳まで、次女は一歳から二歳半まで参加したことになります。

長男出産後は、「乳児を連れての頻回外出は、控えたい」と、思っていましたところ、ちょうど近所に四軒も、同年齢の子どものいる人が、引越して来ました。

近所集団の場合、母親は目的集団ではありませんから、せつせと子どもに働きかけ、子どもが居心地よく集まれる場を、提供しました。子どもと遊ぶのが大好きという母親が、もう一人いましたので、その人と協力して、特に外でよく遊びました。

そうこうしているうちに、ポットンポットンと、少し遠くの子も集まるようになってきて、その輪が広がり、冒頭のような風景になっていくわけです。

今では、母親抜きで、朝から夕方まで、あちこちの家で、お山で、遊び回っています。

友だち遊びを始める三歳頃、長女は、近所の友だちが、こんなに充実していませんでしたから、(のびのびグループは、週一回)文字を初め、室内のこと、机上のことに早くから、興味を持ちました。しかし、次女は、三歳頃から近所の友だち遊びが多く、五歳に近いまでに、文字などに興味を示す暇がないようです。(学年が進むにつれ、いやでも受験地獄に巻き込まれていくでしょうが、できるだけあのびのびと

した、自分の本当にやりたいことが、充実してやれるような幼児期―人生―を過ごさせてやりたいと思います。また長男は、ことばの発達が、非常に遅い方なのに、「貸して」「いいよ」「だめ」「どうぞ」「ありがとう」など、集団で遊ぶのに必要なことばは、早く習得したようです。

こうして四歳位までの、親がまだ友だち作りを手伝わなければならぬ年齢での、二つの集団づくりを経験しました。

その結果、四歳位までの子は、三輪車で、行き来できる距離の、つまり町内レベルの集団が、親にも子にも無理がなく、良いと思えました。しかし、そこではえてして、子どもを遊ばせるために、親が集まるという形をとり、母親自身も成長するという要素が、欠けてしまいます。

結局、のびのびグループのようなものが、地域社会と結びついた形で行なえれば、理想的だったわけです。最近薄れてきている地域社会の連帯が、こんな点からも、見直されなければいけないと痛感しています。幼稚園にも、学校にも属さない子を持つ親にとっては、なおさらです。

四歳を過ぎると、現代では、殆んどの子が幼稚園に行つて

しまうので、友だちを求めてという意味で、長女を一番近い幼稚園に入れました。本人は、とても喜んで、幼稚園生活が始まりました。

そうなると、今度はもう親の手の届かない所で、子どもが自分で友だちづくりをするようになります。年長になってからは特に、「お母さん、今日は、△ちゃん、○ちゃんが、遊びに来るよ」と、私が初めて会う友だちが、我が家に入出入りするようになりました。親は、子どもが開拓していく集団に、後から参加していくことになります。もはや集団づくりではなく、できた集団に、どのように係わっていくかが、これからの私の課題になると思います。

それと平行して、私自身の集団づくりも、進めていかなければいけないと思います。

一番下の子が、小学校に入る頃になったら、自分の子だけの親という殻を飛び出して、三十数年の歴史を持つ、一個人間としての集団づくりを、試みたいと思います。専門が、児童学科でしたから、それがまた子どもに関係した集団である可能性が、高いと思いますが、全ての子どもが、平和に暮らせるように、努力していきたいと思っています。

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十六)

津 守 真

五歳児の製作

5月26日

子どもが自分から作り出すものには、形はとどのつていなくとも、何か子どもの成長にとって意味深いものがあるように思える。五歳児の年長組になったYの家庭での作品のひとつを次に示してみよう。

Yは私に「箱とって」と言う。(空箱は台所の高い棚の下に重ねてある)私はYと一緒に箱の棚の下に見にゆき、Yが「これ」というのをとってやる。Yは「さいころつくろうかな」と言う。私は「さいころもいいし、他のものもつくれるね」という。Yは「とけいにしようかな、どっちにしようかな」と言って箱を見ている。真四角のかなり大きな箱であったが、Yは白い画用紙を出してきて、セロテープで六面に貼り、角を折ってきちんとする。「あたしは数字ができないから、さいころにしたの」と言う。こうして作りはじめると、切ったり貼ったりして、黙ってひと

りで長時間作っている。

「できた。あとはいころ」と言つて、一つの面に丸を四つかく。次の面には大きな丸を一つかき、図(五六ページ参照)のように、丸の中に鳥をかくて、「おりこう」と私にかかせる。次の面には丸を七個かく。次の面には丸を三つかくが、図のように、それぞれの丸の中に、家、鳥、同心円が描かれる。次の面には渦巻きをかき、「ぐるぐるばー」と私にかかせる。次の面は、いくつか曲線をぬりつぶし「くろこげ」と私に書かせる。

「はい できた、さいころですよ——」と言つて、かかえて歩いている。

そのさいころは、しばらく後、部屋の中に放り出してあつた。姉たちの友だちが遊びに来て、そのさいころを、「これなあに」と言つてすぐに興味をもち、遊びはじめる。「ぐるぐるばーが出た」「りこうが出た」と言つて、ころがしてさわいでいる。

この後、何日間も、このさいころは、子どもたちころがされ、人気があつた。

さいころ

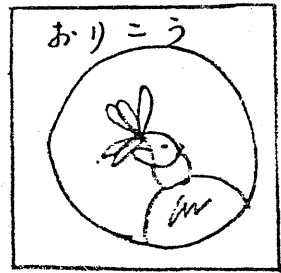
Yは「さいころつくろうかな」と言う。「あたしは数字ができないからさいころにしたの」と言う。このさいころは、すぐろくなどの駒を進めるのに用いるさいころでないことは明らかである。それでは、五歳のYにとってのさいころとは何だろうか。

箱の六面に白い画用紙を苦心して貼ると、「できた。あとはいころ」と言つて、各側面に、図のように描き、その中の三面に、「おりこう」「ぐるぐるばー」「くろこげ」と命名する。このさいころをころがすと、数ではなくて、異なつた図柄が出る。一つの平面に異なつた図柄を並列して描くのではなくて、立方体の異なつた側面に異なつた図柄を描くのであるから、一つの物体が異質な側面を持つことに関心を抱いていると言えるだろう。その立方体を投げると、そのたびに異なつた図柄が出る。

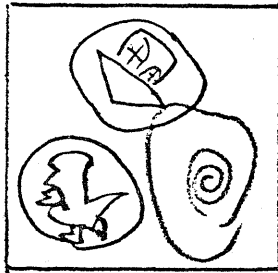
「おりこうと命名されたものは、丸の内側に動物が描かれたものである。Yにとつては、枠の内側におさまつてはみ出ない状態が「おりこう」なのであろう。実際、この子どもは、常識の枠に自分自身をはめておとなしくしていることがしばしばある。

「ぐるぐるばー」と命名されたものは、内側から外側に向う渦巻である。これは丸の中にはめられていない。ぐるぐると回つてば

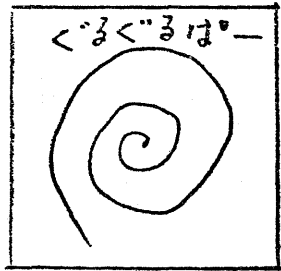
(1)



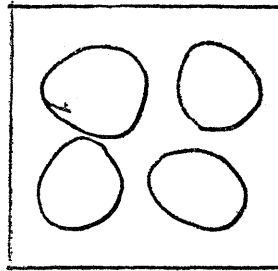
(4)



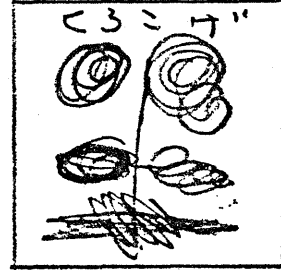
(2)



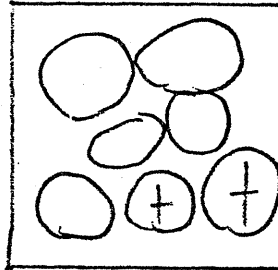
(5)



(3)



(6)



ーと外に向って開放される動きである。Yの成長の過程には、外に向って大胆に足を踏み出してゆく時が何度も見られる。「ぐるぐるばー」というのは、世に言う頭がおかしいということではなくて、ことばの音が示す通り、ぐるぐる回転してばーと開放される動きと言ってよいと思う。

「くるこげ」というのは、黒く強く塗りつぶした図柄である。くるこげは火と関係がある。火にかけすぎて過熱するとくるこげができる。Yは小さいときからクッキーやケーキを焼くのが好きで、くるこげは日常の体験である。そこには、しまった、しくじったという感情体験もふくまれている。また、ふだんは外に表わさないが、ときに激しい情熱を噴出させることがある。それもく

るこげの体験と關係があるかもしれない。

第四面は三つの円形から成るが、そのうち二つは丸の内側にそれぞれ、家と鳥とが描かれたもので、「おりこう」が二つあると言えよう。あとの一つは同心円の渦巻で、「ぐるぐるばー」に相当する。両方が合わさって三個の円を形作っている。

第五面は四個の円である。四は東西南北、四本柱の四、四角の四隅に示されるように、安定した数形である。

第六面は七個の円より成るが、これは恐らく沢山の円のことであり、豊かさを示すものであろう。

こうしてつぶざに見ると、このさいころの各面の図柄は、簡単なようであるけれども、異なった心の動きを反映していることがわかる。

Yはさいころの各面を描き終ると、「はい できた、さいころですよー」と言っておかえて歩いていった。しばらく後、部屋の中に放り出されていたそのさいころは、子どもたちに人気があった。子どもたちはすぐにこれを見つけ、「これなあに」と言ってお手にかかえて、投げてころがし、「ぐるぐるばーが出た」「りこうが出た」などと喜んで大きわぎした。このさいころは、子どもた

ちの共感を得たのである。すぐろくの進度をきめるさいころとしてはなく、ただ投げてころがして、異なった図柄の面が出るのをたのしんだ。それはこの図柄が伝える心の動きが子どもたちの共感と呼んだと言えるのではないかと思う。

このYのさいころには、私も長い間心を魅かれていたが、いまあらためてこれを考え直してみても、その魅力の一端が分ったような気がする。私共自身、社会から期待された枠の内側で「おりこう」にしている時もあるし、また、ある時には、ぐるぐる回転して向う見ずに外にとび出してゆく時もある。また、過熱し、「くるこげ」になって後悔する時もある。それは、一人の人間、一つの出来事の異なった側面である。子どもは子どもなりに、おとなはおとななりに、事柄は違うけれども、人間として共通の体験があるように思われる。このさいころを、両腕にかかえて歩いていった幼児の姿に、このような人間の原体験が蔵されていたことを思うとき、頭の下がるような愛しさを覚えるのである。



(つづく)

史料紹介

エリザベス・ギヤスケル

『マイ・ダイアリー』③

一八三六年 二月七日

今朝私達は、「そして母はこれらの事をみな心に留めていた」という下りのお説教を聞きました。ああ！それは何と真実を伝えていることでしょう——そして私は、私達が万一あの娘を失うことになったとしても、このささやかな日記が、私のいとしい子の思い出をよび起こす宝庫となるかもしれないと思っています。

この前日記を付けてから、感謝しなければならぬ事がたくさんありました。あの娘は日に日に健康になつてきていますし、性質も最近とみに良くなって、穏やかで優しい子になっていくように思われます。私は大でい、あの娘の身体の成長を書くことから、日記を書き始めてきましたが、これからもその順序に従って

ゆきましよう。

あの娘は、椅子やソファーなどにつかまりながらも、一人でなんとか歩くことができます。そしてこのように足の筋肉を鍛える当然の結果なのですが、筋肉はだんだん発達し強くなりました。本当に、全身で健康な子どもになったことを表わしているのです。身体には母の目をととも楽しませてくれる、あの斑点⁽²⁾があります。あの娘には八本の前歯と、四本の奥歯があります。元気がなく、食欲がないものの、ひきつけや熱はありませんから、あの娘の場合、歯が生えることは、割と問題ないと言えましよう。そして、歯が生えそろったなら、また元氣も食欲も取り戻し、それに伴って機嫌も良くなることでしょう。

あの娘は、以前のようなほてったゆらめくような赤味ではなく、今ではさくらんぼ色をしています。本当に、美しさは健康が携えてくるものですね。そして白状すれば、美しさは望まし

笹川真理子 訳

いものだと思えます。確かに、他の大方の賜物と同様に、美しさには誘惑が付きものです。それでも、美しさはその持ち主に、他人に対する影響力を——このようならばらしい目的のために使われることもある影響力を、否応なしに与えるのですから、やはり崇高な贈物と言えましょう。

大てい、あの娘は機嫌良くしています。用心し、注意しなければならぬような小さな癩癩を起こすこともありますが、あの娘はすぐに自分の人差し指をたてて、「シー」と言い、自分が腹を立てた人にキスしようとします。

もう一つのもっとやっかいな短所は、言う事をきかないことです。今のあの娘には、言う事をきくなどという気があるようには思えません。あの娘はとても親切で、私があん娘にして欲しいと思う事をよくやってくれます。しかし時々、あの娘は大変楽しげに、上機嫌で私の言う事をききません。そういう時、私はきちんと叱るべきかどうか悩み、悲しくなります。

たとえば、二つの椅子がひどく離れています。その椅子から椅子へあの娘は伝え歩きをして行きます。私は、危いからママの所へ戻ってらっしゃいと言うのですが、あの娘は声をたてて笑い、向うの椅子の方へ行ってしまうのです。大てい、私は立って行ってあの娘を抱き上げ、元の所へおろします。が、あの娘はまた、大変なご機嫌でやり出すのです。一、二度、私はあの娘の行くままにさせましたところ、あの娘はちょっと転んでしまいました。これは、私があん娘に言っておいたのにもかかわらず、ママ

の言う事をきかなかつたからです。

あの娘はとても優しい子です。私がみじめな時、あるいは誰かが怪我をしたり、気の毒だと思ふ時に、あの娘は、「かわいいそんなママ、かわいいそんなパパ」などと言いながら、顔を撫でてくれるのです。

あの娘の今の最大の楽しみは、手紙ごっこです。ラムおばさんから来た一通をあの娘に読んでやり、「花、あひる」などあの娘の知っている全部のものの名を取り入れてやることなのです。この手紙や絵は、あの娘を大変喜ばせますが、あの娘は理想のようには、そして私がそうさせようと思うほど、ひとりだちしていません。あの娘はひとり遊びをなかなかしようとしません。これは、あの娘の繊細さからきている面も少しはありますが、大部分は、これまでの教育上の誤りに原因があるのです。

あの娘はとも子ども達が好きです。私は、あの娘を今週二、三日コリンズさんの所へ連れていきますが、それであの娘のこの気持ち満たす機会を与えることができると喜んでいきます。コリンズさんには、マリアンヌより五、六ヶ月小さな女の子がいるのです。マリアンヌはとも記憶力が良く、生まれつき良い素質を持っていてようです。私は、それらが私によって損われることがないように願っています。

主よ、「わたし(3)にかくもたやすくからみつく罪」に、私がかわいひ娘と共に陥ったことを、あなたは知っておられます——しかしあなたはまた、私がどんなにひどく後悔し、どんなに

懸命にこれから尽くそうと思つてゐるかも知れません。弱き私をお助け下さい、

ああ主よ、そして、私が自らにうち勝とうと努めますのを祝福して下さい。ああ、あなたがあの娘にお与え下さつた気高い魂を少しでも汚すような怒りの言葉を、私はじつと押えています。ですから、私があの娘をあなたと同様に讃えることを、どうぞお許し下さい。あの娘と私とを祝福して下さい。そして私は、悲しみの中であの娘の欠点を告白し、あなたがあの娘のこれからの行ないをお導き下さいますように、お祈りいたします。ああ、主なる全能の神よ、あなたがあの娘にもっとも良いと思われるように、あの娘を祝福して下さい。しかし、あの娘のこの命が絶えた時に、あの娘があの喜びの言葉を聞けますように。「良い忠実な僕よ、よくやった。主人と一緒に喜んでくれ」という。

一八三六年 十一月五日

今年の夏の大部分は、ナッツフォード、ウェリントン、また海岸へ行つたりして少し落着かない過し方をしました。でもこれは、長い間日記を付けるのを怠つたことの言い訳にすぎません。

この前書いてから、おちびさんは当然のことながらとても成長しました。しばらくの間歩こうとしなかったの私をちょっと心配させましたが、健康で、体の調子の悪いところは何もないと思えます。

私がナッツフォードに（五月）いた時、ディーンさんはあの娘に全く足を使わせませんでした。ですからあの娘は歩く気が全くなくなつてしまつたのです。その前はちゃんと歩こうとしていたのに。でも、あの娘はプロスペクト・ヒルでとても丈夫になりました。

ただそこで、あの娘はひどいひきつけを起こしたのです。（それは、まるで痛みを感じた時のような、激しい泣き声で始まつたのでした）それで私達は、あの娘をすぐにお湯に入れて、ひまし湯を塗り、それと共にお医者様を呼びにやりました。お医者様は、あの娘が犬歯の生える時期にさしかかつてゐるための炎症だと診断しました。お医者様は、私がすぐにとつた処置は、子供が急にひきつけになつた場合の、もっとも良い、確かなものだと云つて下さいました。

この問題の犬歯が生えてしまうと——もっと正確に言うなら、一八三六年七月の初め、あの娘が二十二ヶ月の時です。あの娘は突然と云つていいほどに、一人で歩き始めたのです。それ以来、身体は本当に丈夫になつてきています。時々今でも、歩くのがいやになつて「だっこ、だっこ」と言う時に、それをきき入れることにはとても慎重な態度をとつています。なぜなら、あの娘は歩く練習を大変楽しく感じてゐますので、だっこを求めるのは気まぐれからではなく、疲れているからに違ひない思ふからです。あの娘はとても注意深く、危険に対する感覚があります。それが他の子ども達とは違つてゐるところです。普通の子ども達とは、

ちょっと早すぎると思われる時期にもう歩かせられるので、危険を判断することができないように思われます。あの娘が歩くまでの道筋でなしたお手柄話は、このくらいにしましょう。

あの娘には今、十六本の歯が生えていて、奥歯も生えつつあるようです。でも比較的痛みがないようなので、私はこれについては心配していません。私はよくあの娘の身長を測ろうと思つていましたが、どういう訳か、これまで機会がありませんでした。でも、あの娘の洋服から察するところ、この八週間にあの娘はだいぶ背が伸びたようです。あの娘にはそれがとても必要だったので。なぜならあの娘は、ちょっとコロコロしてましたから。

あの娘は、少しも舌を休めることのないおしゃべり屋さんで有名です。意味のわかることも、わからないこともありませう。あの娘が、調子を変えて、新しい音をたくさん発明して、わけのわからない事を言っているのを聞くのは、楽しいものです。あの娘の好きなのは、「おはなし」や短い詩を聞くこと。そして、あの娘はかなり覚えがよいようで、それらをまねて繰り返して言えます。

私達は、あの娘の未熟な能力をせき立てる気持ちは少しもないので、あの娘にはまだ何も教えていません。しかしこれに對して、私達はいろいろな点で確信を持っています。私達は最近、あるお医者様の意見をききました。彼によれば、三歳ごろまでの幼児の脳は、ほんのわずかに刺激が多過ぎても、常に炎症をおこしやすい状態にあるそうです。もし私達があの娘に、観察し、注意

し、我慢する習慣をつけてやるなら、あの娘の幼い心が何で占められることがあつても、私達は良い基盤を築いているのだと思ふことでしょう。そして四歳が、勉強などを始めるのに十分な時期だと思ひます。しかしその時でも、それはあの娘の学びたいという意欲に應じてのことです。そして私は、その意欲を起させなければならぬのです。さて、知力についてはこの位にして道徳について書きましょう。

ああ！あの娘が悪いことをしたために、私が大変落胆したことがたびたびありました。私を感じやすいために扱い方をひどく間違つて、あのようになちよつと頑固な癩癩をおこさせ、今までのわがままを招いたに違ひないと思われることもありませう。しかし、いつもこうであつたとは思ひませぬ。そのような場合でも、私の冷静な判断力で、その原因をある程度解明する点が、あの娘の身体の状態にあることに気づいたこともありませう。

たとえば、あの娘は（この母と同様に）睡眠をたっぷりとらなければなりません。あの娘はいつも七時までに、またそれよりも早い時間にベッドに入り、眠ることもしばしばです。早くとも六時前に起きることは、めつたにありません。それから、あの娘は昼間二、三時間のお昼寝を必要とします。もし万一お昼寝の時間が過ぎてしまうと、あの娘は疲れてむずがり、いつもの明るくて楽しげな子とは、似ても似つかなくなりませう。

私達は、お仕置をどうしようかと悩みませう。悪い子を部屋の隅に置いておく普通の手は、あの娘にはききめがありませんでし

た。あの娘はそれを、「あたしすみっこに行つて、悪い子になる」というゲームにしてしまったからです。それで私達が最近やるのは、あの娘を降りられないほどの高い椅子にすわらせて、少し反省の色が見えるまで、（大てい誰かが同じ部屋にいますが）そこに一人でおいておくことです。これは、私達が厳しい、悲しそうな顔つきをすることとあいまって、ほとんどの場合あの娘に望んだ効果を与えました。

あの娘は、よく自分の行ないの結果について話します。「あたしい子なら、パパとママしあわせね」「あたしい子じゃないとパパとママとっても悲しいの」などと。あの娘はこんなに幼い子にしては、何が正しくて何が悪い行ないかという正しい認識を持つていると思います。

最近誰かが怒つて、あの小さな子がどんなに神様の代わりを果たすのかなど思ひもせずに、あの娘の前で明らかに悪いことをした時の例を挙げてみましょう。その時、あの娘は何も気に留めた様子はありませんでしたが、翌朝、そのことについて話したのです。「あれはいけないことね」と付け加えて。私がそれとなく話している神へ、あの娘の愛と敬いの気持ちに向けて、私はとても関心を払っています。あの娘の良い事、悪い事に対する認識力を損わないことが私の義務だと思ひました。ですから、「それはとてもいけないことだったけれど、彼女は今ではとても反省しているのよ」などと言うだけになりました。

教週間前に、あの娘はあまり好きでないものがスプーンでさし

出されると、「ない、ない」と言つて食べるのをいやがることを覚えました。私は、一番良い方法は、あの娘の言葉に従つて黙つてお皿をさげてしまうことだと思ひました。そうすると、あの娘は怒つて、最初は悲しげな泣き声をあげ、それからそっくり返つてしまいました。しかし、二度こんなことをしてからはずっとわがままでなくなり、今ではとても楽しみに食事をしています。あの娘は他の欠点はどうであれ、とにかく欲張りな子ではないと思ひます。

あの娘は、もう自分は十分だといふ時を知っています。この前ナッツフォードにいた時、あの娘は自分本位ではないといふ、とてもほほえましい例を示してくれて、私は大変嬉しい思ひをしました。私達が、一人はマリアンヌより九ヶ月大きく、もう一人はマリアンヌよりずっと小さな、二人の子どもを持つディーンさんの家を訪れていた時のことでした。カーペットの上にボンボンがいくつかころがっており、それを一番小さな子エミリーちゃんはうまくつかめないようでした。ところが、私のかわいいマリアンヌは、ボンボンが大好きだったので、自分で一口口に含むかわりに（エミリーちゃん）にそれを食べさせたのです。それで私は、心暖まる思ひがしたのです。

私は、きちんと守れない約束をあの娘にした事は一度もないと思ひます。その結果、あの娘は私達の言葉をとて信頼してきます。それで、約束はきつと果されると思つて、先の楽しみを確かなものにするために、今の楽しみをあきらめることをかなりよく

心得ています。

⁽⁵⁾ グランジであの娘が海水浴をしなければならなかった時、私はそれはあの娘にはどうかと懸念しました。幸運にも、第一級の泳ぎ手であるアンおばさんが私達と一緒に、あの娘の世話を引き受けてくれました。これは、見慣れないものを着た知らない女性の手に託されてこわがるより、ずっと良いことでした。私達は、不安な時間をできるだけ短くしようと、さっそくあの娘の服をぬがせ、ただちに水に入れました。私はあの娘を受け取り、ビスケットをおあげる用意をして、ショールをもって岩の上に立っていました。服をぬがされながら、あの娘は（ママ、あたし泳がない）と何度も言っていたにもかかわらず、泣きも叫びもしませんでした。

あの娘は最近、⁽⁶⁾ エプソン塩を一、二服飲む機会がありました。私は予め、それはとてもまずいけれど体に良いものだと言っていましたのですぐ飲みましたが、コップが口から離れた時には、本当に泣きたそうな顔をしていました。でもごほうびにビスケットをもらうと、そのしかめ面もすぐにやめます。

時々私達は、私達の喜びの印として、あの娘にカステラ一ことか、ボンボンを六つとか、一切れのボンフリッツケーキなどをあげています。しかし私達は、本当にたまにあげるこれらのものではあの娘の期待を煽るのではなく、あの娘の手にしたものは、私達の嬉しそうな顔つきや表情、そしてあの娘と一緒に喜んで遊び戯れたいという私達の気持ちからのものというようにしたいと思っ

ているのです。私達はこの俗世間的な両親の甘やかしの愛が、いつかもっと崇高な気持ちに昇華されますようにと願っています。

数週間前に、あの娘はベッツイーと一緒に散歩をしていて、女の子のお葬式に会いました。そして道々その事についてあの娘が知りがったので、ベッツイーは無分別にも、しかし全くありのままに、それは彼らが穴の中に入れて土をかけようとしているかわいそうな子なのだと語ったのです。これはあの娘に強烈な印象を与えました。一、二度夜中に目を覚ました時、あの娘は恐怖を示しながらすぐその事を繰り返した話すので、私達はあの娘が、その夢を見ていたのだと悟りました。それで私達は、あの子はとてもしあわせで、ねんねしたのですよなどと言って、興奮した気持ちを和らげようと最善を尽しました。あの娘は、かわいらしいさやかな夢の印を示して、大変いじらしい子です。一、二度私がつまらない事でよくよしているように見えた時、あの娘は私の所へやってきて、キスを求めてかわいいうなり声をさし出したのです。また昨夜は、私は痛みを感じてうなり声のようなものをあげました。⁽⁷⁾ あの娘は私のそばに横になっており、確かに眠っていたのですが、まるであの娘の優しい愛の本能が眠っていてもあの娘を促したかのように、あの娘は「ママ、キスして」と言って私に寄りそってきたのです。これらはつまらぬ事ですが、これらの思ひ出は何と尊いものとなることでしょう。

私達は昨日、一人息子を——九つか十のいい子を——⁽⁸⁾ クループの突然の発作でなくしたばかりの、ウィリアムの親戚の人の話を

聞きました。その父親と母親は、その子に夢中でした。そしてその子は、あらゆる面で前途有望だったのですけれど。ああその話を聞いた時、何と私は震えたことでしょう。そして「土の器の中のこれらの宝のはかなさ」を何としみじみ感じたことでしょう。

ああ、神よ私の意志ではなくて、あなたの御心がなされたと感じ、言えるような精神を与えて下さい。あなたの御心にすべて従って、このいとしい子を愛すことを、私にお教え下さい。わからぬ先のことはあえて考えませんが、あなたは試練の時にも私を励まして下さることでしょう。ですから、あなたの御手に私の宝物をゆだねます。ああ、主よ、あの娘をあなたが最善と思われるようにして下さい。あなたは愛の神であられ、故なく苦しめることはなさらないでしょうから。主なるイエス・キリストの御名によって、あの娘にあらゆる祝福がありますよう、心からお祈りいたします。
(津田塾大学)

註

- (1) 書ルカによる福音書二章五一節
- (2) 蒙古斑のこと。日本の乳児は九九%に見られるが、ヨーロッパの乳児では約5%に見られる。色は、青色ではなく灰色である。
- (3) 聖書ヘブル人への手紙十二章一節
- (4) 聖書マタイによる福音書二五章二節
- (5) 海岸行は、夫ウィリアムの弟で医師のサミュエルがマリアンヌの健康のために勧めた。夫ウィリアム方の母、兄弟姉妹も一緒に行き、楽しい夏を過ごしたと思われる。
Winifred Gerin, Elizabeth Gaskell, A Biography, Oxford, The Clarendon Press, 1976
- (6) 下剤に用いられる。また浴湯に加えて発汗を促す。
- (7) 当時ギヤスケル夫人は妊娠八ヶ月の身重であった。
- (8) 偽膜性喉頭炎(子供の喉頭や気管を侵す炎症。激しいからせきと呼吸困難を伴なう)
- (9) 聖書コリント人への第二の手紙四章七節

幼児の教育 第七十八巻第五号

五月号 © 定価二五〇円

昭和五十四年四月二十五日 印刷
昭和五十四年五月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製品不良がございましたら、おとりかえいたします。

夏のヨーロッパ視察旅行

15日間

8月11日～8月25日



フレーベル先生 生家

幼児教育のルーツを求めて、従来は入国のむずかしかった東ドイツを中心としたヨーロッパ視察の旅に出してみませんか。幼児教育の祖、フレーベル先生の遺跡をたどりながらヨーロッパの自然にふれ、メルヘンのさとに遊ぶ旅にお誘いいたします。



経路

東京→コペンハーゲン→東西ベルリン→エルフルト→ブランケンブルグ→オーベルバイスバッハ→リュースハイム→コブレンツ→フランクフルト→チューリッヒ→ローマ→パリ→東京

期間

昭和54年8月11日～8月25日

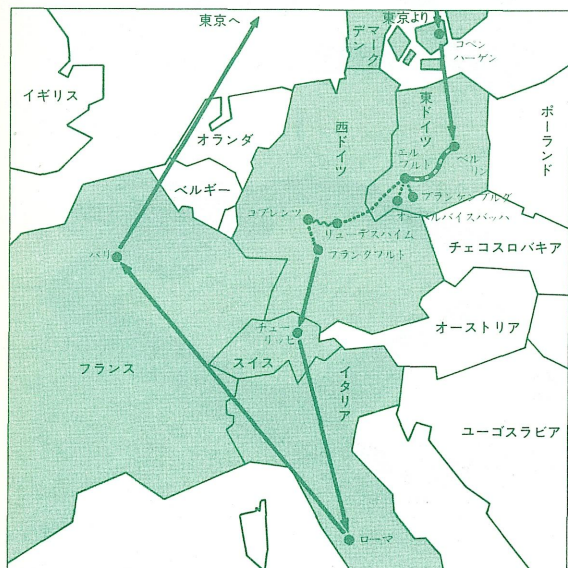
人員

30名（定員になり次第メ切）

費用

575,000円（ローン可能）

※尚詳細については、フレーベル館代理店又は、支店に資料をご請求ください。



主催 フレーベル館現代幼児教育研究会
日本交通公社団体旅行新宿支店

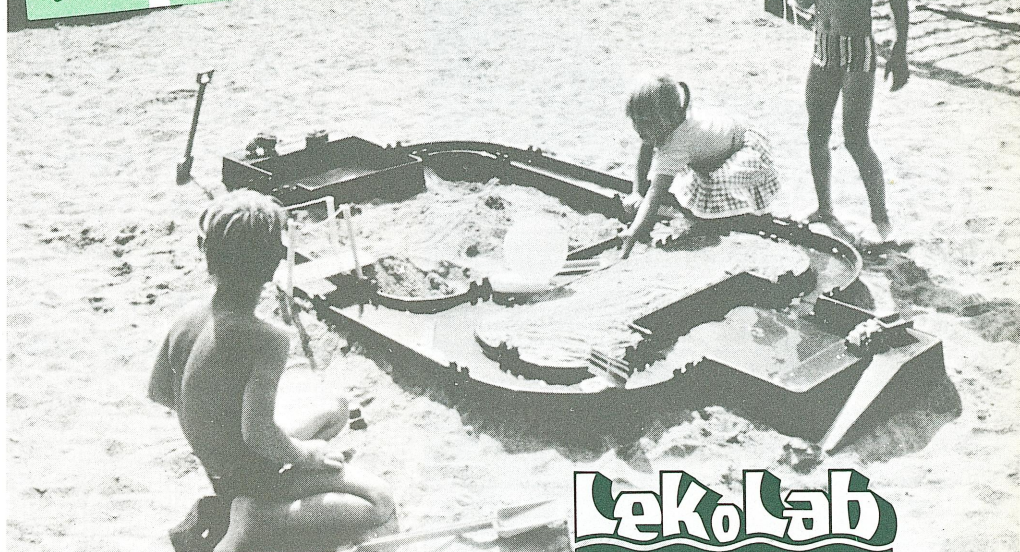
お問い合わせ（TEL）は

- フレーベル館・東京03-292-7781
- 日本交通公社・東京03-346-0170



スウェーデン生まれの

砂場遊び・水遊び遊具、新発売!!



LekoLab

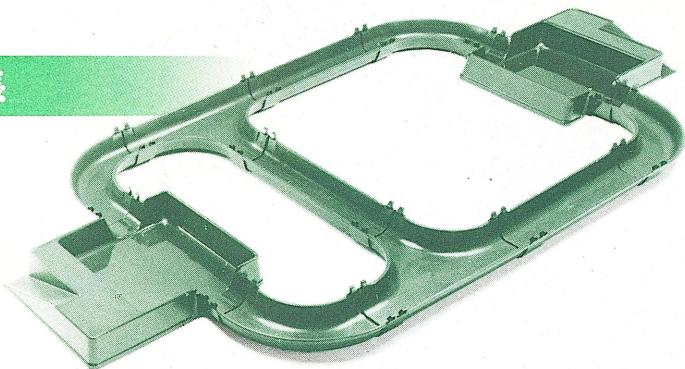
- レコラブは、スウェーデン政府の発明助成を受けて開発された新製品です。
- スウェーデン・米国・西独・日本はじめ世界の主要国に実用新案出願中の製品です。
- 日本国内では、フレーベル館が一手に販売します。

レコラブ

1セット 60,000円

レコラブの特長

- 組立てが簡単です。
- 丈夫で長持ちします。
優れた品質のプラスチック（ポリプロピレン・ABS）
- 軽くて、コンパクトに収納できます。
- 砂場遊び、プール遊びなど、遊びがぐんとワイドになります。



★フレーベル館では、砂場遊びをよりバラエティゆたかにする砂場用品を多数取り揃えております。

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館